

東方愛骨伝

お煎餅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある骨がいた。

その骨は、ギヤグとホットドッグをこよなく愛していた。

その骨は、とても弟思いだった。

その骨は、……… 殺された。

これは一人の骨が織り成す幻想の物語。

※当小説は「東方project」及び「UNDERTALE」の二次創作作品です。
ネタバレ要素を多大に含みます。
ご注意ください。

目次

幻想入り

64	# 8	飛び交う弾幕 飛び回る魔女	
	# 7	なんやかんやで居候	56
	# 6	妖精二人と博麗神社	43
35	# 5	着いたぞ人里！弾ける食欲！	
	# 4	彼がいた世界	27
	# 3	第一住人発見！	20
13	# 2	骨はこうして幻想となる	
	# 1	プロローグ	1

9 勝負の後にはいじられ役が必要
です

10 パンにソーセージを挟むだけ

の簡単なお仕事

11 お似合い夫婦？

紅霧異変

12 紅き異変の幕開け

13 門番に魔法使いに瀟洒な従者

14 巫女とメイドって真逆じゃな

い？

15 攻撃は避けるもの お嬢様は

煽るもの

124

幻想入り

#1 プロローグ

はあっ……はあっ……

俺は、もう何度アイツに説得の言葉をかけたのだろうか？

俺は、もう何本アイツに骨を突き刺したのだろうか？

俺は……

もう何回アイツを殺したのだろうか？

……いい加減そろそろ限界だ……

「よし……もう良いだろう。もう十分だ。」

「俺の必殺技のお披露目といくか。」

「いくぞ？ 必殺技　　何もしない。」

「……………」

……表情だけで、もうアイツがイラついてるのが解る。

「ああそうだ。真正正銘、何もしない。」

「俺はお前を倒せない。」

次のターンで確実に……………」

「俺はお前に殺される。」

「だから、俺はお前に二度とターンを譲らない事にした。」

……………正直、俺はアイツに勝てるとは思ってない。

……………アイツは何度でも戻ってくる。

死ぬ都度

強くなつて

学習して 戻ってくる。

……………対して俺にあるのは、骨とケチャップと本の少しの

「決意」だけ。

「決意」だってアイツのそれに比べたら俺のなんて微々たるものだ。

……………俺はもう疲れた。

今日の前では、動けなくて更にイラついているアイツがいる。

「……………」

眠った。

モンスター殺しである僕を前にして、
弟の敵である僕を前にして、
皆の敵である僕を前にして、

コイツはいびきをかきながら眠った。

頭の中で声が響く…

*攻撃を続ける

その言葉に従い、彼の元にゆっくりと近づいた。

*攻撃を続ける

かつては友達でもあつたその骨に向かつて獲物を構える。

*
こ
ろ
せ
:
—
)

「へっ…まさかとは思うが本当に…」

「おそい」

ズ
バ
ッ

9
9
9
9
9

……
鈍い痛みが走る……

切られた拍子に懐に入れといたケチャップのボトルが破裂して、まるで鮮血のように宙を舞った。

.....
痛い.....
初めての感覚だ。

「.....
まあ.....
そりゃあ.....
こうなるだろうよ。」

.....
やっぱり駄目だった

「だが、俺はちゃんと警告したからな。」

.....
友達だと.....
思ってたんだがな.....

「さてと……俺はグリルビーズにでも行くかな。」

意識が朦朧とする。

目が霞む。

最期に、いるはずの無い俺の最愛の弟に……

手を、伸ばす

「…………… パピルス… お前も何か頼むか？」

…………… 伸ばした手は、何にも触れることはなく

むなしく 空を切った。

「貴方にはこんなところで死んでもらうては、困りますわ。」

最期にそんな声が聞こえた気がした。

i
n
u
e
d

t
o
b
e
c
o
n
t

#2 骨はこうして幻想となる

..... し..... もし..... きて.....

何か聞こえる。

勘弁してくれよ..... さっきまで働きづめでヘトヘトなんだよ。

もう少し..... 寝かせ..... ろ..... Z Z Z

「起きなさいー」ベシッ

「オニオンサアン！」

急に叩かれたから変な声が出ちまった。

「まったく..... ようやくお目覚めとは..... とんだ寝坊助さんね。」

「..... 悪いね。寝坊助はオイラのアイデンティティーなのさ。」

まだ寝惚けていて視界があやふやだが、

ぼんやりと目の前に何かがいるのは分かった。

「うーん？ あんたはいったい誰だ？」

「あら、私としたことがまだ自己紹介をしていなかったわね。」

そう言うソイツは持っていた扇子を広げ口元を隠しながら笑った。

「私は、八雲　紫　一応大妖怪よ。」

「やくも… ゆかり… 成る程、覚えたぜ。」

名前は解ったが「ようかい」ってのがよく解らんな。

「ところで紫、ようかいってのは何だ？」

「ああ… そつか、貴方のいた世界には妖怪がいなかったのね。　「妖怪」… 人間の恐

れ等の感情から産み出される。まあ、貴方達「モンスター」とそんなに変わらないわ。」

ふーむ。つまり「妖怪」は、人間の恐怖の感情で動く「モンスター」ということか。

「さて、話しは変わるけど。貴方には「幻想郷」という

ところに行ってもらうわ。」

「急に話しが飛躍しすぎじゃねえか？」

「幻想郷には先程の「妖怪」をはじめに、亡霊や妖精、

神なんてのも居るわよ。」スルー

「ちよ… ちよつと待ってくれ。神はともかく何だ？ぼうれいや、ようせいって…」

「亡霊Ⅱ死んだ人

妖精Ⅱ羽生えた小さな人… OK？

「O… OK。」

コイツだんだんめんどくさくなつてやがる…

「ところで……私、まだ貴方の名前を聞いていないのだけど？」

「oh!……そういやそうだったな。」

オイラは

「 S a n s 」

見ての

とおりただのスケルトンさ。」

「まあ、これから仲良くしよーぜ？」テヲサシダス

「S a n s というのね。私からも宜しく頼むわ。」テヲニギル

プウゝ プツ プウゝ

「……………」

「おっと。スケルトンの手を握るときは気を付けな。」

「どっかの馬鹿が手に、ブーブークツション仕掛けてるかもしれねえからな？」

「唐突だな？」

「作者があんまり時間無いんですって。」

作者「勘弁してください（土下座）」

「（作者？）まあ、解った。」

「早速幻想郷に送ろうと思うんだけど。」

まず一つ、幻想郷は全てを受け入れるわ。それはそれは、残酷なまでに。」

（俺様はお前を受け入れるぞ!!!）

「……………」

「……成る程な。それで？」

「全てを受け入れる。そこには善も悪も無いの。」

たとえ「悪」でも、幻想郷は受け入れる。」

「だけど…… それを利用して悪さをはたらく奴も居るわ。」

「貴方には、それを正す役割りをしてもらいたいの。」

「……… つまり……… お巡り「さんず」ってどこか？」ツクテーン

「ブフツw……… ま……… まあそういうことね。」

「へっへっへっ……… OK理解したぜ。」

「では、これから貴方を幻想郷に送るわ。」

そう言うとき紫は、扇子を閉じてそのまま扇子で空を切った。

すると切ったところに線が入り、何かが開いた。

「WAO……… コイツは何だ？」

「これは私のスキマよ。私の「境界を操る程度の能力」で作ったものよ。」

「能力……… そんな物まであるのか………」

……… どうやら「幻想郷」とやらは、相当ファンタジーな世界のようなだ………

「このスキマを抜ければ、幻想郷よ。」

「つまり？ここに入れと？」

「ええ………」

「喰われたりしないだろうな？」

「しないわよ!!!! (*、旦那)ノ!!!!」

「へっへっへっ…… 流石に冗談だ……」

「まあなんだ…… 色々ありがとうな…… 紫」

「ええ…… では良き幻想ライフを…… S a n s……」
そう言つてオイラはスキマを潜つた

「S a n s…… 幻想郷ではせめて幸せに生きて。」

d

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

#3 第一住人発見!

暗い……。それがスキマに入って最初に思ったことだ。

それに色んなところから目玉がギョロギョロとオイラを見ている。

「なんだか、気味が悪いな。」

少しだけ歩いていくと、急に視界が明るくなった。

暗いところから急に明るくなったから目がくらんだ。

「うおっ…… 眩しいな。」

目を開けると、圧巻の光景が視界いっぱい広がった。

「WAO…… こりゃ凄い……」

今オイラの目には雄大な自然が映っている。

「()が……〔幻想郷〕……」

しばらくの間時間も忘れて、自然を眺めていた。

「いい所じゃないか。」

そう独り言を呟いていた時

ガサツ

「……………」

後ろから何かが聞こえる……………」

「……そこに誰がいるのか？」

「いるよ。」

呼び掛けると気の抜けた声とともに、可愛らしい女の子が飛び出してきた。

「……あんたは？」

「私はルーミアなのだ。」

「どうやら、コイツはルーミアと言うらしい。」

「貴方の名前は？」

「ん？……ああ……オイラはS a n s。ただのしがないコメディアンさ。」

「そうなのか」ぐうぐ

オイラが自己紹介を終えると同時に、ルーミアの腹がおもいつきり鳴った。

「……………」 お前さん……腹減ってんのか？」

「そうなのだ、もう三日も何も食べてないのだ。」

「すげえな……………」 「人間」 ってのは、三日も何も食べなくても生きれるのか。」

「お前さんは、どんな食い物が好きなんだ？」

「貴方は？」

「オイラか？ オイラの好きな食べ物ホットドッグだ。」

「ほつとどつぐ？ 何それ？ 美味しいの？」

「お前さん……ホットドッグを食べたこと無いなんて、人生の8割7分2厘は損してるぜ？」

「!?……そんなに美味しいのかー!?」

「本当に食ったこと無いんだな……………よし、じゃあ、いつかオイラが

お前さんにホットドッグを^ご馳走してやるよ。」

「本当に!? (キラキラ)」

「ああオイラは「約束」だけは、守る男だぜ？」

「こんなに嬉しそうな顔をされるとコツチまで嬉しくなる

「はあ〜?! 楽しみだなあ〜?!」

「あつ……. そういえば、何だかんだ聞いてなかったが、お前さんの好きな食べ物は？」

「人間なのだ〜」

「……………は？」

今コイツは何て言った？ 好きな「食べ物」が「人間」って言ったのか？

「…… お前さん、妖怪だったのか。」

「えっ? 気づいてなかったのか?」

「ああ、まったく気づいてなかった。」

良く考えてみれば、紫も人型で「大妖怪」と言っていた。此処では妖怪は、人型のも
のが多いのか?

「ところで、…… 貴方は食べてもいい人類?」

ゾクツとした。…これが、「妖怪」か…

「あー…… ここには、人類なんていないぜ?」

「それにオイラは、あまり肉付きが良くないぜ?」

「でも、もうお腹ペコペコで我慢出来ないのだー!!!」

そう言うや否や、ルーミアはオイラめがけて飛び掛かって来た。

「おっと。」

オイラはしゃがんで避けた。

「むく… 避けるな〜!」

そうすると、ルーミアは一枚の紙切れのような物を取り出した。なんだあれ?

闇符「デイマーケイション」

「おっ?」

ルーミアが何か唱えた瞬間、沢山の光る玉がコッチに向かってきた。

「へえ〜。」

綺麗だなど思って見ていたら、光る玉が当たった木が爆発した。これは当たったらいけないっほいな。

自分のすぐ近くに来ていた玉……いや、弾を寸でのところで避ける。

M I S S

避けること自体はそこまで難しくない。だがどうするか。

♥? A C T

♥? 調べる 話す

*ルーミア：A T T K 1 2

D F E 4

人食いの妖怪

ホットドッグを食べたことが無い

「くらうのかー!」

月符「ムーンライトレイ」

ビームのような物を射ってきた。

M I S S

調べる ♥? 話す

「あー… ルーミア? 取り敢えず一旦落ち着こうぜ? な?」

腹が減ってんなら、オイラが何か買ってやるから。」

「本当に?」

「ああ… 本当だ。」

「分かったのだー」

♥ ? MERCY

♥ ? 見逃す 逃げる

* You Win!!! O E x p と 13Gを手に

いれた

「ふう：．．． そんじゃどつかに何か食べに行くか？」

「うん！」

「この辺りだとどこがいいんだ？」

「人里だったら、食べるところが沢山あるよ！」

「OK：．．． じゃあ人里に行ってみるか。」

t o b e c o n t i n u e d

4 彼がいた世界

ルーミアと何かを食いにしよう、現在オイラは人里に向かって歩いてる。

「なあ……ルーミア。人里つてのはどんなどころなんだ？」

「幻想郷に住んでいる、「人間」の里なのさ。」

「それって妖怪は入っても良いのか？」

「大丈夫だよ。里の人間を襲わなければ、退治されることも無いしね。私は、普段里の「寺子屋」に通ってるよ。」

「聞きたいことがいくつもあるな。」

「なに？」

「退治されると言っていたが「妖怪」を退治出来る人間がいるのか？」

さっきのようにあの弾を大量に射たれたら、人間が太刀打ち出来るのか？

「人間は基本的には妖怪より弱いんだけどね、一部の

特殊な人間達に退治されるんだよ。」

「特殊な人間？」

「うん。「博麗の巫女」とか「白黒の魔法使い」とかね。」

「…成る程な、取り敢えず、その二人がヤバいってことは分かったぜ。」

「博麗の巫女」と「白黒の魔法使い」か……覚えておこう

「それと、もうひとつ。「てらこや」ってのは何だ？」

「うーんと、簡単に言うとな勉強を教えてくれる所だよ。」

勉強を教える…そんな所まであるのか…

「あつ！ 見えてきたよ！」

「ん？ どれどれ」

視界の先には遠目から見ても賑やかな町のような物がある

「あれが…人里か。」

「うん！ さつ！ 早く行こう！ もうお腹と背中がくつつきそうなのだ！」

「OK オイラも久しぶりに動いたから腹ペコだぜ。」

門番のような奴も見えるが本当に大丈夫なんだろうか？

「止まれ！ ここは人里だ！ 妖怪が勝手に入るのは駄目だ！」

「えー、でもお腹が空いたのさ。」

「駄目な物は駄目だ。」

「おい、ルーミア。人里には入れるんじゃないのか？」

「うーん、いつもなら入れるんだけどな。」

「なあアンタ、何で里に入ったら駄目なんだ？」

「最近、里の中で行方不明事件が多発している。よって、怪しい者を通すわけにはいかんのさ。」

「成る程な……ルーミアあっちにも事情があるみたいだぞ。」

「むう。」

「おい！その骨！」

「Sansだ。」

「今からお前達の報告に行ってくる。上白沢さんという人だ。それで許可が降りたら、通してやる。」

「oh！ そいつは有り難いな。」

「だから俺が戻るまでここを一步も動くな。」

「……だそうさ、ルーミア。」

「分かったのだ。」

「よし… じゃあ行ってくる。」

「さて、また二人になっちまったな。」

手持ち無沙汰になったオイラは骨を指の上でくるくる回した

「ねえ、Sans。」

「ん？… どうした？」

オイラはルーミアと呼ばれたから回していた骨をキャッチして仕舞った。

「今さらなんだけどさ。Sansって外来人？」

「がいらいじん？ 何だ？ そいつは。」

「えっとねえ、幻想郷の外の世界から来た人の事だよ。」

「外の世界か…」

詳しくは聞かされていないが、オイラも多分ジャンルとしてはそこに含まれるんだろ

う。まあ、強いて言うなら…

「外来人じゃなくて外来〔骨〕だな？」

「じゃあさ じゃあさ、Sansが前まで暮らしていた世界のお話してよ！」

「オイラが、暮らしていた世界？」

「うん！」

「そんなの聞いたって面白くもなんともないぞ？」

「でも聞きたい！」

「うくん、そうだなあ。じゃあ少しだけな？」

「オイラが前まで住んでいたのは地下の世界だ。」

「地下の……世界？」

「ああ。地下世界にはオイラみたいな「モンスター」が沢山いるんだ。」

「色んな奴がいたな……」

母親みたいなオバサンに……

最高にCOOLな弟に……

みんなの憧れのヒーロー……

ちよつとオタクな発明家や……

そいつに作られたスターのロボット……

優しい王様もいたな……

そして……

スゲーあつたかい〔人間〕も…

そんな個性が強すぎる奴らと毎日、面白可笑しく過ごしてたんだよ。」

「へえ、色んな奴がいたんだね。」

「ああ。そいつらのおかげで、毎日退屈しなかったぜ。」

（あら、貴方とってもジョークがお上手なのね。私にも教えてくれない？）

（Sans!!何回靴下を片付けろと言ったら分かるんだ!!まったく、俺様が付いてないとてんで駄目だな！）

（ンガアアアア!! Sansぼさつとすんな！ 情けないぞ!! いつもいつも、お前という奴は！）

(ね… ねエ… あ… 貴方って… あ… アニメとか… 好き?)

(君のジョークで僕と一緒に番組を盛り上げて行かないかい? 君がいれば、最高視聴率待った無しだよ!)

(やあSans。どうだい? これから一緒に紅茶でもいかがかな?)

(
)

S
a
n
s

「今思い出しても最高の「友達」だったな……」

「良いなあ。何か楽しそうなのだ。」

「おい！骨！許可が降りたから通つてもいいぞ！」

「おつ。意外に早かったな。それとオイラはS a n sだ。」

「やった！早く行こう！」

「h e h …… はいよ。」

t o
b e
c o n t i n u e d

#5 着いたぞ人里!弾ける食欲!

「へえ。賑やかで良いところじゃないか。」

オイラとルーミアは今、人里内を散策中だ。

ルーミアと何を食べるか話し合いながら、歩いている。

「あゝ うどん食べたい♥? あっ! でも豚カツも捨てがたい。」

さつきからこんな調子だ。食べたい物を見つけては、あーでもないこーでもないと唸り続けている。

「うくん…… S a n sは何か食べたい物ある?」

おっと、御呼びが掛かったな。

「いや、特に無いな。お前さんに合わせるぜ。」

「何でも良いってゆうのが一番困るんだよ!」

「理不尽だな。じゃあ…… そうだな……。」

そう言っただけでオイラは周りを見渡す。

「おつ。あそこなんてどうだ?」

オイラは一軒の「定食屋」を指さす。

「定食か。…… うん…… たまには良いかも！」

「決まりだな。早速行こうぜ。」

ガラガラガラガラ

引き戸を大きな音を立てて開けると、良い匂いが鼻(?)をくすぐった。

「いらつしやいませ〜！」

取り敢えず目に入った適当な席に座った。

「生姜焼きおいしそ〜?? …… でもお魚も♥?」

ルーミアはメニューを眺めながら、よだれで小さな水溜まりを作っている。

「やっぱり生姜焼きにしよう！」

「決まったか?じゃあオイラもお前さんと同じのにしようかな。」

「お決まりですか?」

店員が注文を取りにきた。仕事早いな。

「生姜焼き定食を二人ぶん頼むよ。」

「かしこまりました！」

そう言うと店員はそそくさと厨房の方に戻って行った。

「ねえねえSans〜。」

「ん?どうした?」

「何でもなーい。呼んだだけー。」

「何だ?構ってほしいのか?」

「違ーう。何かSansの事を呼んであげなきゃいけない気がしたの?」

「なんだそりゃ。」

本当になんだそりゃ。

「あつ!そうだ!Sans!」

「どした?」クルクル

「どうしてさつき私の弾幕避けられたの?もしかして弾幕ごっこやったことあるの?」

「弾幕ごっこ?」クルクル

「幻想郷での戦い方の事だよ。力だったら人間は妖怪に勝てないから、弾幕でフェアな戦いにするんだよ。」

「へえー。」ギャクカイテンクルクル

「さつきからなにやってんの?」

「ケチャップのボトル回してる。」クルクル

「楽しい?」

「嫌、全然。」クルクル

「お待たせしました!生姜焼き定食でございます!」

「やったー」

「ありがとうさん。」

何だかんだ、もう俺も腹ペコだ。

アレ？ オイラノニクガイチマイタリナイゾ？

ユダンタイテキダヨ

ルーミア？

く少女&骨 食事中く

「あく美味しかった！」

「だな。かなり旨かった。」

「ねえSans次は、どうすr「見つけた!!!」

「ん？」

何か随分と変わったナリをした、女性がコツチに向かつてきている。

「コラ！ルーミア！今日は寺子屋に来る日だろ！なのになのにどこにいたんだ!？」

「あつ！慧音先生！ごめんなさいなのだく。」

「まったく、数日も寺子屋にこないから心配しただろう。今日の門番が急に報告に来た
と思ったら、「金髪の人食い妖怪と骨」が来たと言うじゃないか。驚いたよ。」

「それで君が件の骨妖怪だね?」

「ああ。Sansだ。宜しくな。」

「私は上白沢 慧音だ。宜しく頼むよ。」

やたら礼儀正しい人だな。

「ところで、Sansはルーミアと何をしていたんだ?」

「あー。実はオイラついさつき幻想郷に来たばかりでな?偶然会ったルーミアに案内人 兼 話し相手になってもらったのさ。さっきまで一緒に飯食ってたんだ。」

「成る程。分かったよ。Sansはこれからどうするんだ?」

「ん?どうするとは?」

「君は外人人なのだろう?これから行く宛は有るのかと聞いているんだ。」

「あー…… 無いな。」

「なら、「博麗神社」に行ってみたらどうだ?」

「「博麗神社」?「博麗の巫女」と何か関係が有るのか?」

「関係もなにも、博麗の巫女がそこに住んでいるんだ。」

成る程な……

「そいつはどこにあるんだ?」

「此処から東にずっと進んだところだ。」

「OKじゃあ、そこに行ってみるか。」

「少し遠いぞ？」

「まあ……」
「コツコツ」進んで行くよ。骨だけにな？」ツクテー

「……プツ ……」
ww「プルプル

「じゃあ、ルーミア。短い間だったが、ありがとさん。」

「うん……。」

「?なにしょぼくれているんだ？」

「また、会えるかな？」

なにかと思っただらそんなことか……

「ああ。「約束」したろ？」

「! うん!」

「よしよし。素直な奴は好きだぞ。」ナデナデ

オイラはルーミアの頭を撫でた。

「えへへ……」
／／／

若干照れくさいな。

「じゃあ、そういうことだから。オイラはそろそろ行くよ。」

「うん! またねSans!」

オイラは背中にルーミアの声を受けながら、手を振り替えた。

何だか、Sansと離れたくない。そう思った。

Sansが昔話をしてくれたとき、私は変な感じがした。

(楽しい思い出を語ってる筈なのに、なんで……そんなに「寂しそうな顔」をしているの?)

Sansに頭を撫でられたとき、何だか胸の中があつたかくなつた。

「わは／＼／＼」

まだ感覚が頭に残ってる。

「ん？どうした？ルーミア。何か嬉しそうだな？」

おっと。顔に出ちやっつてたのか。

「何でもないのだ、慧音先生。」

今度は、Sansに「ほつとどつぐ」をご馳走してもらおう。

今からとつても楽しみだ。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

6 妖精二人と博麗神社

「自然が綺麗だな……。」

今、オイラは「博麗神社」に向かつて、自然を観て楽しみながら歩いている。

地下世界にも多少は自然があつたが、ここまで綺麗な物は無かつた。

「〜♪」（鼻歌）

ああ…… 何だろうな？ …… 心が洗われる感じがする……

ん？ 向こうの方から水の音が聞こえるな。川でも有るのか？

「…… 行つてみるか。」

オイラは上着のポケットに手をつ込みながら、歩き出した。

「WAO…… こりゃあ…… 壮観だな。」

そこには大きな湖があつた。霧が出ていて、自然を少しだけ隠していた。それがさらに幻想的な風景を作り出している。奥に見える赤い城（？）のような物が若干異質だが……。

「やい！ その白いのー！」

ふと、後ろからやけにデカイ声が聞こえた。

「ん？オイラの事か？」

見てみると、青いワンピースを着た、背中に羽の有る女の子と 似たワンピースを着た、緑髪のこれまた背中に羽の有る女の子がいた。

「アタイの縄張りに入るとは良い度胸ね！」

青いのが言う。

「チ・・・チルノちゃん・・・やめようよ。」

今度は緑が言う。青いのはチルノと言うらしい。

「なんでよ大ちゃん！ここはアタイの縄張りなのよ！」

緑は大ちゃんか・・・

「あー・・・ここはお前さんの縄張りだったのか。悪かったな。」

「あつ・・・いえ、こ・・・これはチルノちゃんが勝手に言ってるだけで、ここは縄張りなんかじゃなくて、だから・・・えつと・・・その・・・。」アタフタ

焦りすぎだ

「OK 分かったから、一回落ち着け。深呼吸しろ。」

少女鎮静中

「……落ち着きました。」

「そいつは良かった。んじゃとりあえず自己紹介から始めてくれ。」

「アタイは「チルノ」幻想郷で一番さいきよーなんだぞ！」

「私は、「大妖精」といいます。皆からは「大ちゃん」って呼ばれてます。」

「ふむ……チルノに大妖精か……OK把握した。オイラはSansただのしがいない
コメディアンさ。」

「よしSans！アタイと勝負しろ！」

「いきなりだな？」

まったく、初対面の骨には気を付けろって習わなかったのか？

「行くぞー!!これでも食らえー!!」

氷符 「アイシクルフオール」

オイラは身構えたが、弾幕が全くコツチに向かってこない。

「なに!? アタイのスペカを一発でクリアするとは、やるな!!」
「……………」

なんかコイツ、パピルスと同じ匂いがする……

「なら、これでどうだ!!」

凍符「パーフェクトフリーズ」

「今度はちゃんと向かってきたな。」

と思ったら、弾幕が止まって急に動く向きを変えた。

「うおっ。」

M I S S

「何気に危なかったな。」

「むっ。やるじゃんか!」

「今度はオイラの番だぜ?」

♥ ? A C T

♥ ? 調べる

ジョーク

チルノ : A T K ⑨ D F E ⑨

*さいきよーの妖精 ⑨の匂いがする

「食らえー!!」

雪符「ダイヤモンドブリザード」

沢山の弾幕がばらまかれる。自分に一番近い弾だけ避ける。

M I S S

調べる

♥? ジョーク

「おいおい、止めてくれよ。氷はもう「こおり」ごりだぜ。」

「ブハツ……… W W W W W ギャハハハハハ W W W W W」

*チルノは笑いすぎて疲れたようだ。

「ハハハ W W W …… なんか沢山笑ったら疲れた。それにあんたと戦うの飽きた。」

♥? MERCY

♥? 見逃す

逃げる

* You Win !!!

0 Expと⑨G手に入

れた。

「何で、反撃してこないのよー!!つまんないじゃない!」

「チルノちゃん!大丈夫?」

「大丈夫もなにも、コイツ全然反撃しなかったから。」

「コイツじゃねえ。Sansだ。」

「Sa…… Sansさんも大丈夫でしたか?」

「ああ、ピンピンしてるぜ?避けるのだけは、得意だからな。」

「よ……良かった。」

「なんだ?随分とお人好しだな?」

「大ちゃんはね、すっごい優しいんだよー!!」

「へえー。そうなのかー。」

「チルノちゃん!Sansさんもやめてください!… / / /」

大妖精はからかいがあるな。

「ねえ、そういえばSansはここで何をしてたの?」

「ん?…… ああ、オイラ「博麗神社」に向かってるんだった。悪いが案

内してくれねえか?」

「アタイの子分になるなら良いよー!」

子分か：： まあ別に良いだろう。

「構わないぞ。」

「本当に!?! やった! 今日からS a n sはアタイの子分で、アタイはS a n sの「ししょー」ね!」

「あいよ。で：：。しししょー。案内してくれるか?」

「しよがないわねえ。アタイに感謝しなさいよ!」

「ありがたやー ありがたやー(棒)」

「あははは：：。」

大妖精も苦笑いだ。

「でねー、そんな時に大ちゃんが：：。」

「おう。そいつはスゲーなあ大妖精?」ニヤニヤ

「チルノちゃん! : : / / /」

今はチルノ達と駄弁りながら、「博麗神社」に向かっている。

「ねえ、Sansはどこから来たの?」

「そいつはどういう意味だ?」

「だから幻想郷に来る前にどこにいたの?」

「わ. . . 私も気になります!」

「地下世界にいたんだ。」

オイラはルーミアに話したことと同じことを言った。

「へえー。」

「とつても楽しそうな所ですね。」

「そうだろう?」

とかなんとか喋ってたら.

「あつ! 見えたよ!」

「あそこが博麗神社です。」

「随分長い階段だな。」

本当に長い。疲れそうだ。

「じゃあ、アタイ達は帰るね。なんかあつたらすぐにししよーのアタイを呼びなさいね

！」

「Sansさん。また会いましょうね。」

「ああ。助かったぜ。ありがとさん。」

「いえいえ、チルノちゃんも言っていました。何かあつたら呼んでくださいね？」

「おう。その時は頼むわ。」

「はい！ではこれで。」

そう言つてチルノと大妖精は飛んでいった。

「さて、頑張るか。」

オイラは階段を、一段一段登り始めた。

30分後

「ぜえ…ぜえ…なんだってこんなに階段を長くしたんだ。」

何はともあれ もうすぐ頂上だ。

「ぜえ…ぜえ…つ…つ…着いたあ。」

今更だが、本当にオイラ体力無いな。

視界にはお世辞にも綺麗とは言えない、さびれた神社が映っている。

「…………… ここには、巫女が住んでいると聞いたが…………… 本当にいるのか？」

「あら。ちゃんといるわよ？」

…………… 聞き覚えの有る声でした。オイラは後ろを振り向いた。

「数刻ぶりね？ Sans。」

「紫か……………」

「私じゃあ不満かしら？」

「嫌 むしろありがたいな。人里の慧音に博麗神社に行けと言われたんだが、どうす

れば巫女に会える？」

「そうねえ…………… 取り敢えずお賽銭を入れてみたら？」

賽銭？ なんてだろうか。

「分かった。」

オイラは賽銭箱の前まで行ったのだが……………

何だ？ この賽銭箱。一銭も入ってないじゃねえか。

…………… 神社で合ってるよな？

「まあ、良いか。」 チャリーン

作者「一旦ストップ！皆さんSansが持つてるGは
1G || 500円位とお考えください。では、再生！」

「お賽銭??」

「うおっ！」

「!? 500円も入ってる！貴方が入れてくれたの!？」

「あっ… ああオイラが入れたが…」

「有り難う!!!」キラキラ

何だ？何だ？

何で急に人が出てきた？

何で賽銭箱に飛び付いている？

何で500円で感激している？

何で… 腋が空いている？

情報量が多すぎてわけがわからん。

「取り敢えず、一旦落ち着こうぜ？嬉しいのは分かったから。」

「おっと。取り乱したわね。ごめんなさい。」

「別に良いぞ？オイラはSansただのしがないコメディアンさ。」

「Sansさんね。分かったわ。私は霊夢。「博麗 霊夢」よ。」

「霊夢か：：分かったぜ。これから宜しくな。」

「ええ、こちらこそ。」

「まったく、霊夢ったら、はしたないわね。」

「何よ紫。あんたいたのね。」

「最初っからいたわよ！」

「来たなら賽銭していきなさい。」

Sansさん取り敢えず家が上がって。お茶でも出すわ。」

「oh！ そいつはありがたい。正直、階段登ったから喉が乾いていたんだ。」

「うう：：。(；ω；)」「チャリーン

t o b e c o n t i n u e d

#7 なんやかんやで居候

「つまり…… Sansさんは、元々地下の世界にいた、外人人つてことね。」

「ええ、そうよ。」

今は、博麗神社にて霊夢が淹れてくれたお茶を飲みながら、オイラの昔話をしている。

「ズズツ……… ああ…… 旨いな。霊夢はお茶を淹れるのが上手なんだな。」

「そうでしょ？美味しいでしょ？お茶請けも有るから、どんどん食べて！」

「ああ。ありがとな。」

「ねえ、霊夢？私には？私にはお茶請けないの？」

「無いわ。（スッパリ）」

「ちよつと部屋の隅っこ行ってくる。」シクシク

「まあまあ紫。元氣出せつて。」

「うう…… Sansう……。」

「ほら。オイラの羊羹、半分あげるからさ。」

「うう…… ありがとう……。」

「Sansさん、ソイツに優しくする必要は無いわ。」

「まあまあ、良いじゃねえか。」

「くあwse drft gyふじこlp」

「!？」

「なに!？」

「おや？オイラのケチャップかけ羊羹はおきに召さなかったか？」ニヤニヤ
「Sansさん。なかなかやるわね？」ニヤニヤ

「そうだろ？」ニヤニヤ

「お……おええ……… 何いまのは、ウツプ……… 宇宙が見えた気がするわ。」

「ここで吐かないでよ？吐くならアンタの隙間のなかにも吐きなさい。」

「ホラよ。お茶だ。今度は何にも入れてないぜ？」

「……………。」ジトメ

「要らないのか？じゃあ、オイラが残りも飲んだ「飲む！飲みます！」

「じゅっぷん！」

「ふう… 大分落ち着いたわ。」

「そうか。」ヨウカンモグモグ

「…………… 本当にそれ、食べるのね…。」

「当然だ。」モグモグ

ケチャップはなんにでも合う。究極の調味料だぜ。

「話は変わるけど、霊夢、Sansをここに住ませてあげてほしいのよ。」

「はあ!? 何ですよ!」

霊夢がちやぶ台に身を乗り出して抗議する。

「紫、それは初耳なんだが?」

「じゃあ貴方どこで暮らすつもりだったのよ?」

「いや、適当に野宿とかするもんだと……………」

「そんなわけないじゃない…。」

「だが、紫。オイラは男だぞ? そして霊夢は女だ。この意味がわかるか?」

「あら? 貴方が霊夢を襲うのかしら?」

何を言っているんだ、コイツは。

「な………… 何言ってるのよ!! この年増! / / /」

「ちよつと霊夢さん? 今、聞きづてならない事を聞いた気がするのだけど?」

そりやあ怒るだろうよ。考えたら分かるだろうに。

「まあ…… 良いわ。Sansは、ここに住ませます。これはもう決定事項よ。」

「嫌よ！そんなの！」

「ほら、霊夢もこう言つて……………」

「賽銭箱壊すわよ？」

「Sansさん！一緒に暮らすわよ！部屋は有るから！」

「……………」

酷い手のひら返しだ。

「決まりね。じゃあSans、私はこれで帰るわね。帰つて〔橙〕に癒されなきや……。」

また、NEWキャラだ……

「…………… まあ礼はしとく。助かったぜ。」

「はい。それじゃあね。」テ フリフリ

そう言つて紫はスキマに消えてつた。

「……………」

「……………」

……………
気まずいな。

「あ…………… そんなわけで、これから宜しく頼むわ。」

「え?… あ!… うん、宜しく…。」

「……………」

「さ… 最近… 暖かくなってきたな?」

「え?… ええ… そうね!」

「……………」

気まずいわ!!

何よこれ!何か気がついたらSansさんと暮らす事になってたし、Sansさんが
気を使つて喋りかけて来てるし!

さつきは賽銭箱の事で頭が一杯だったけど、落ち着いて考えてみたら…ヤバい
じゃない!

だって…骨とはいえ、男の人と一緒に暮らすなんて!

「うう……。／＼／＼」カアツ

あー……この状況は、なんとというかマズイ。年頃の女と一つ屋根の下とは……
ジョークにもならん。

アンダインと住んでた事はあったが、あのときはパピルスも居たし、それにアンダイ
ンは……男っぼいし。

「どうするかな。」「どうしよう。」「」

そんな感じで悶々としていたら、一つの大きな声が響いた。

「れーーーーーいーーーーーむーーーーー!!」

「ん？誰の声d（（ガツシャーーーーーン!!!）（（!!）!）?」
「また、アイツか……。」

オイラ達は大きな音がした鳥居の方に向かった。

「いつてえ、スピード調整ミスっちゃったぜ。」

「〔魔理沙〕 アンタは何回境内に突っ込めば気がすむの？」ゴゴゴゴ

「悪い悪い！だからそんなに怒んなよ！」

〔魔理沙〕か……

「ん？何だ？見慣れない奴がいるな？」

「おっと、コイツは失礼した。オイラはSans、ただのしがないコメディアンさ。」

「ああ！宜しくな、Sans！私は〔霧雨 魔理沙〕普通の魔法使いだぜ！」

コイツが 白黒の〔魔法使い〕だな。

「Sansはどうしてここにいるんだ？」

「実は彼、ここに住むことになったのよ。」

「へえ。そいつはまたどうして？」

「スキマ。以上。」

「御愁傷様だぜ……………」

「まったくよ……………それで？アンタは何しに来たの？」

「いや、暇だから霊夢と駄弁ろうかと思っただが……………気が変わったぜ!!!」

「S a n s !!!私と勝負しろ！」

「勝負？良いぜ？ケチャップがぶ飲み選手権でもするか？」

「違う！そしてケチャップは飲むもんじゃねえ！」

「ヘッヘッへ……………冗談だよ。それで？何で勝負するんだ？」

「決まってるぜ！幻想郷での勝負事と言ったら、

「弾幕ごっこ」しかないだろ？」

良くわからない八角形の物体を構えながら、魔理沙は言い放った。

t o b e c o n t i n u e d

#8 飛び交う弾幕 飛び回る魔女

弾幕ごっこか……ルーミアもそんな事を言っていた気がする。

「おいおい、オイラ痛いのは嫌だぞ？」

「大丈夫だ！当たらなければ痛くないぜ！」

そういう問題か？

「ちよつと！魔理沙！Sansさんはまだ「スペカ」も持ってないのよ！」

「無いなら、作れば良いぜ！」

聞き慣れない単語が聞こえたな。

「霊夢、「スペカ」ってのは何だ？」

「え？ああ！まだ説明してなかったわね。」

「弾幕ごっこってのはなんとなく分かる。だが、「スペカ」は良くわからん。」

「えつと、まずスペカっていうのは「スペルカード」の略なの。特殊な紙に自分の使いた

い弾幕や、技を残しておくことで、使うことができるのよ。」

「うーん？つまり？骨にも分かるように究極的に説明すると？」

「弾幕ごっこで使う「必殺技」だぜ！」

「弾幕ごっこでは、事前に使うスペルカードの枚数を申告しなければ行けないわ。相手を弾幕や技でピチユラせるか、相手のスペルカードを全て避けきれば勝ちよ。」

成る程な……つまり倒すか、逃げるかということか。

「OK 把握した。」

「じゃあ、まずはスペルカードを作りましょうか。」

「ああ、頼む。」

そうすると霊夢は1度部屋に引つ込み、すぐに紙束を持って戻ってきた。

「はい、これがスペルカードの元よ。これに自分の使いたい技を思い起こすの。」

どうみても普通の紙にしか見えないのだが……

「まあ、やってみりゃわかるか？」

オイラはその紙を顔の前まで持っていき、目をつぶって技を思い浮かべた。

「……………」

しばらくすると、持っていた紙が淡く光始め、模様が浮かび上がる。そして、1度強く発光した後静かになった。

「出来たな。」

「出来たわね。」

「出来たぜ。」

オイラは手の中の「カード」を見つめた。

「よし！スペカもできたことだし、早速勝負だ！」

「へへッ…… お手柔らかに頼むぜ？」

BGM 「恋色マスターパーク」

「私が使うスペカは3枚だ！避けれるもんなら避けてみる！」

「いくぞ!!」

魔符 「スターダストレヴアリエ」

魔理沙の回りにいくつかの魔方陣が現れ、そこから大量の星形弾幕が放出された。

「WAO…… コイツは、綺麗だな。」

魔理沙のあり得ない量の弾幕が、Sansさんに降り注ぐ。

「魔理沙！なに初心者に本気でスペカぶっぱなしてんのよ！正気!?!」

「やっべえ……… 力加減ミスつちまつたぜ！」

「ミスつちまつたぜ！じゃないわよ！Sansさんに何かあったらどうするの!?!」

「本当だよ。オイラじゃなかったら、粉々だぜ？」

後ろから少し低めの声が聞こえた。

「え？」

魔理沙と私の声が重なった。

「Sans(さん)!!? な… 何で？」

「ん？どうした？ただなにもせずそこに突っ立って攻撃を食らうとも思ってたのか

？」ニヤニヤ

信じられない…… 弾幕初心者が魔理沙が本気で射った

スペルを避けきるなんて………。

「へへへ、面白くなってきたぜ!!!やるなーSans!

私のスペルを初見で避けるとは!

「だろ? 割りところというのは、得意なんだよ。

さあ、勝負を続けようぜ?」

「ああ! のぞむところだ!」

そう言うと魔理沙はまた、大量に弾幕を展開してきた。
自分に近い弾から順に避けていく。

M I S S

M I S S

M I S S

「おお！すごいなお前！…だが、コイツはどうだ!？」

彗星「ブレイジングスター」

すると魔理沙の箒が光を纏い、一気に加速してこちらに突っ込んでくる。更に魔理沙が通ったところに、星形弾幕が展開される。

「おっと。」

M I S S

後ろを見ると、星形弾幕が近くまで迫ってきていた。

「ちっ……仕方ねえか。」

オイラは後ろから長い骨を数本生やして弾幕を防いだ。

「!?なんだ今の!」

「ん?お前さんが攻撃に星を使うように、オイラは攻撃に骨とか、色々使うのさ。
…………… というわけでオイラもここからは攻撃していくからな?」
「かかってこい!」

「いくぜ?」

オイラが指を鳴らすと、魔理沙の胸の前に青いハート
が現れる

「ん?何だこれ?」

オイラは、腕を振り下ろす。

「うわ!」

魔理沙は地面に叩きつけられた。

「な、何だ？今の？ 体が思うように動かねえ。」

Sansが腕を振り下ろした直後、私の体がまるで何かに引つ張られるように、地面に叩きつけられた。

「〔これは何だ〕 ってか？オイラがお前のSOULを操ったのさ。」

Sansの声がする。

「何だよ、SOULって？どういこと」

そこで私の声は止まった。

そこにいるのはSansだ。紛れもなくSans本人だが、1つだけ決定的に違った。

「お前…… 何だ？…… その〔目〕は……」

Sansは、左目だけ青く光っていた。

「オイラの能力みたいなもんだ。」ハッハッハ

Sansが不敵に笑っている。

Sansがもう一度指を鳴らすと、急に体が軽くなった。

Sansの目は元に戻った。

「あー…：良かったな？これが「弾幕ごっこ」で？」

弾幕ごっこではなく…：…これがもし「実戦」だったら…：…
「もしもこれが「実戦」だったら…：…：…：…：…：…」

お前さんとつくに死んでたぜ？」

久しぶりに、「怖い」という気持ちを感じた。

t o b e c o n t i n u e d

9 勝負の後にはいじられ役が必要ですよ

魔理沙視点

「怖い」なんて感じたのいつぶりだろうか？

霊夢が本気で切れたって、あそこまで恐くない。

紫にババアって言ったって、あんなに殺気を飛ばさない。

今のSansの目は、光がない。物のたとえとかじゃなく、

本当に光がない真つ黒な目だ。

怖い…… 足がすくんできた。

私が一人で恐がつっていると、

「ヘッヘッヘ……」。軽いジョークだよ。こうでもしないとやってられなくて

な……。ビビったか？」ニヤニヤ

なんて言ってきた。

「ジョーク？今の全部？……成る程、まんまと掌の上で踊らされたって訳か。」

そう考えていたら、無性に腹がたってきた。

「成る程な……。ジョーク……。ジョークか！」

「そうそう、お茶目なスケルトンジョークだけ？」

「はっはっは！こりや一本とられたぜ！」

「heh……。heh……。heh 一本取ってやったぜ。」

「お前からは、あばら骨を一本といわず十本ぐらいぶち抜いてやろうか？」ゴゴゴゴ

「おおく恐い恐い。だが、お前さんも最初オイラを下したら殺してたる？だからこれでお相子だ。」

むっ……。それを言われると少し痛いな。

「で？どうするんだ？まだ続けるのか？」ホネクルクル

コイツ、余裕ぶっこいてやがるな？

良いだろうその挑発に乗ってやるよ！

「当然だ!!私はまだ一枚スペカを残しているし、Sansもまだまだ余裕なんだろう?」
「そこなくっちゃな?」

Sans 視点

ようやく再開か。大分時間かかったな、そんなにオイラ恐かったかな?

「コイツでラストだ!!!次はさっきのようにはいかないぜ!私の十八番受けてみる!!」

そう言つて魔理沙は八角形の物体を構えると、そこに魔力が溜まっていくのが分かった。

「良いぜ?かかってこいよ。」

「恋符.....マスター.....」

そう宣言すると、その竜の口から青白い光線が放たれる。

魔理沙のマスタースパークと、オイラのブラスターがぶつかり合う。

その衝撃で地面には少しひびが入り、木が何本かへし折れた。

少しの間ぶつかり合っていたが、最終的にお互いがお互いを相殺して、爆発した。

「……………スゲエ。スゲエ！スゲエよSans!!」

まさか私のマスタースパを相殺するなんて!!」

「ヘッヘッヘ……………スゲエだろ？これがオイラのかくし球の一つ」 Gast er

B l a s t a r 「だ。」

「ガスターブラスター…………… かつこいいいな!!」

「ありがとな。魔理沙のマスタースパもかなりカッコ良かったぞ？」

「へへへ／／／ そうか？」

「ああ、そうともさ。」

「へへ、サンキュー！お前とは気が合いそうだぜ！」

「コイツは奇遇だな。オイラもそう思ってたんだ。」

「昨日の敵は今日の友！これで私達は友達だな！」

嬉しい事を言ってくれるな、少しからかってやろうか。

「何言ってるんだ？会ったばかりで友達にはなれねえぞ？」

「え？」

「オイラたちは赤の他人だぜ？そんなすぐに友達になれるわけねえだろ？」

「……………そ……………そうだよな！……………ごめん。」シユン

あつ、シユンとした。少し罪悪感が出てきたな。

「……………よし、そろそろ良いかな。」

「何が？」

「ん？いや、お前と会って大分時間たったからもう良いかなって。これで晴れてオイラ

とお前さんは友達だな？」

「!!……………ああ!!友達だぜ!!」

「ヘツヘツへ。改めて、宜しくな？魔理沙」

「宜しく!!Sans！」

「……………。」

「人間の友達は、二人めだな。」

「あら？それは、私のこと？」

霊夢が何故か、どや顔をしながら出てきた。

少しムカついたから、からかってやる。

魔理沙に目配せをする。

すると、魔理沙が意味を察したのか、ニヤリと笑った。

「お？オイラがいつお前さんと友達になったんだ？」

「え？だつて一緒に暮らすじゃない。」

「一緒に暮らしたら、友達になんのか？強いていうなら、霊夢とSansは大家さんと住人だぜ？」

「そういうことだ。友達になりたいなら、お願いするんだな。『私も友達にしてください

！』つてな？」

「な……… なんて、私がそんなこと……。」

「お？霊夢は、そんなことも言えないのか？」

かあくつ 博麗の巫女も堕ちたもんだねえ？」

「う…… とう／＼／＼」

さあ霊夢は、どうするかな？

「………さい。」ボソッ

「何だつて？オイラ骨だから良く聞こえないなあ？もつと大きな声で。」

「私も………さい。」ボソッ

「Sansさんや。あたしやもう年かのう？全然聞こえんわ。」

「私も………して………さい。／＼／＼」

「もつと大きな声で！」

「私も友達にしてください!!!!／＼／」

「え？オイラ（私）たち友達じゃなかったのか？」

「うがー………っ!!」

「霊夢が切れた。逃げるぞ魔理沙。」

「了解だ!!総員撤退く！」

「待ちなさくさい!!アンタたちく！」

t o b e c o n t i n u e d

#10 パンにソーセージを挟むだけの簡単なお仕事

よう、Sansだ。

あの日魔理沙と弾幕ごっこをしてから実に一週間が過ぎた。この一週間の間にあった大きな出来事をあげるとしたら、友達が増えた事と、あとは就職先が決まったぐらいだ。

魔理沙と共謀して霊夢をからかったあの後、無事に霊夢に仲良く捕まった。それで、説教をくらっていたら外に何かが落ちてきたんだ。

何だと思ってみてみたら、女の子が地面に文字通り突き刺さっていた。

その女の子を三人で発掘して、話を聞いたらソイツは

自分の事を「烏天狗」の「射命丸 文」だと名乗った。

霊夢と魔理沙は知っていたようで、文を見た時点で嫌そうな顔をしていた。文は、

「最近噂になっている有名な骨さんに、取材に来ましたー」

と言っていた。後で聞いたことだが、文は新聞記者なのだという。

それで、しばらくの間取材を受けて、色々質問に答えていった。

たまに「好きな食べ物は？」とか、「好きな本は？」とか、「それ聞いて何に使うんだよ」っていう質問が飛んできた。

取材(?)を受けていると、今度は白い犬っぽい見た目した奴が来て、「文様!いつまで取材しているのですか!?!」

と文の耳を引つ張りながら言った。

ソイツの名前は「犬走 椀」といい、ちなみに犬ではなく、「白狼天狗」という種族だそう。

少しの間、その二人と駄弁っているうちに仲良くなったというわけだ。

そしてもう一つ「就職先」の話だが、まず始めに何故面倒臭がりのオイラが働く気になったかというところ……

単刀直入に言って、金がないのだ。

主に腋紅白とか親友の魔法使いのせいだな。

さすがに稼がなきゃヤバいってことで、白羽の矢が立ったのがオイラって訳だ。

人里に行って仕事の募集記事を見たが、どれもオイラには合わない仕事ばかりだった。

それを霊夢に報告すると、

「合う仕事が無いなら、作りなさい!!」

と、無茶ぶりを受けた。

紫の協力を得ながら、人里にホットドッグの店を作ることになったんだ。オイラホットドッグ作るのは得意だからな。

そんでもって今日やつと準備が整ったから、今日から働くんだ。

今は人里に向かって歩いてる。

「改めて考えると、濃い一週間だったな。」

そんなことをぼやきながら歩いていると、

ガサツ

後ろに何かいる。何だこの既視感…

「そこに誰かいるのか?」

誰がいるのかはもう分かっているが、わざと白々しく聞いた。「いるよ。」

次の瞬間、背中にものすごい衝撃が来た。

「グフツ………」
もう少し勢いを下げられると、オイラとっても助かるな？

「ルーミア」。

「えへへ。久しぶり！Sans」ギュー

「おいおい……つい一週間前に会ったろ？」ナデナデ

「わは／＼／＼」

「それで？またこんなところで何してたんだ？」

「お腹空いたのだ……」

「またかよ……」

ん？待てよ。丁度いいんじゃないか？

「よし、ルーミア。実はオイラな？人里で店を開くんだよ。」

「そーなのカー。」

「ああ。「ホットドッグ」の店なんだけどな？」

「!!…………… ほつとどつぐ…………… つてことは。」

「〔約束〕 果たそうぜ？」

「やったく!!ほつとどつぐ??」 ジュルリ

効果てきめんだな。

「なら早速、人里に行こーぜ？」

「うん!!」

元気な返事をして、ルーミアはオイラの後ろについてくる。

「くく」マンメンノエミ

本当に楽しみだったんだな…………… 味の期待に沿えなかったらどうしよう。

く人里く

門番のオツサンを適当にあしらって、人里内に足を踏み入れた。

「ほっほっほー、ほつとどつぐー♪、ほつとなどつぐで

ほつとどつぐー♪」

さつきからルーミアは、この意味のわからん歌を歌っている。

「おつ、あつたぜ。あそこがオイラの店だ。」

「おー!.....お？」

そこには、一つの見張り小屋のような物がある。

「.....えーと、Sans? 店はどこ？」

「何言ってるんだ? 目の前に有るだろ?」

「私の目の前には小屋しか無いんだけど。」

「だからその小屋さ。」

「えええええええ!!」

いいリアクションだな。

「ううう騙された。」

「この小屋もオイラにとつては立派な店だぜ? 嘘は言つてないぞ?」ニヤニヤ

「もう店でも小屋でもなんでもいいや! 取り敢えずお腹空いたのだ〜!」

「ご注文は?」

「ほつとどつぐー！」

「へっへっへ……… 毎度あり。」

ルーミア視点

はあ、やつとだ！やつと「ほつとどつぐ」が食べられる！

Sansにこの話を聞いてから、ずっとその事ばかり考えながら味を想像していた。

どんな食べ物なんだろう？

どんな食感なんだろう？

どれだけ美味しいんだろう？

はっ！いけないいけない。また水溜まりが出来てた。

「ぐうぐうっ」

まだかな♪まだかな♪

「はいよ。お待ちどうさん。」

!!! ほっとどっぐー!

「ああ。コイツがホットドッグだぜ。」

そう言つて差し出されたのは、何かに何かが挟まった何かだった。

「へえ〜これがほっとどっぐか〜。どうやって食べるの?」

「まずは、ケチャップをお好みでかけて……」ケチャップカケル

「うんうん! それで!」

「そんで食う。」ガブツ

「早っ! それだけ?」

「ああ、食べ方なんてソイツの自由だ。冷めないうちに食べるよ。」モグモグ

「じゃ…… じゃあ」

そう言つて私はケチャップをかける。

それを近くまで持つてくると、いい匂いがしてきた。

「(ゴクリ)」

思わず唾を飲み込む。

「い…… いただきます。」

「おう。召し上がれ。」

私はそれに端っこからかじりついた。

パリッと心地のいい音が鳴り響き、肉汁が口のなかに広がる。

ケチャップのほどよい甘味と絶妙にマツチしていて、

最終的にふんわり柔らかい何かが包みこんだ。

ゆつくりと味わうように咀嚼し、飲み込む。

Sansは、頬杖をついて私の反応を眺めている。

「う……………」

「う？」

「旨……………いい!!!!!!」

「!？」

「ナニコレナニコレ!?!美味しすぎるんだけど!？」

「あー…ルーミア？」

「特にこのパリツとした奴！これが美味しすぎる！」ガブツ

「ルーミア？一旦おちついた」「こんな美味しいもの今まで知らなかったなんて！」
Sansが何か言ってるが聞こえない。

「……………」

「Sans!!」

「ど…どうした？」

「おかわり!!」

そうやって私は、Sansに皿を差し出した。

t o b e c o n t i n u e d

1 1 お似合い夫婦?

結局あの後ルーミアは、ホットドッグを5回もおかわりして帰っていった。(しっかりとお金は払ってもらった。)

今日も人里で仕事だ。

オイラは自分の小屋に入り、準備をする。

それが終わったら頬杖をつけて、ひたすら客を待つ。

「やっぱり幻想郷では、まだ馴染みが無いのかもな。」

そこまで考えたら、ばかでかい欠伸が一つでた。

「ふわ〜あ」ウトウト

最近はずに霊夢のせいで若干、寝不足気味だ。

「少し……寝るか……だいじよぶ……ほんのすこし……だ……け……
ZZZZZZZZ」

「……………ず……………おき……………ほつと……………べたい。」
「ね……………そくなんだろ……………ねかし……………ろうぜ？」

「むにやむにや……………ZZZZZZZ」

「起きてつてば!!」ペシン

「手ミーさん!!」

急に叩かれたから、また変な声が出ちまった。

「ん？誰だ？」

「霊夢よ。」

「私もいるぜー！」

目を開けると、

霊夢と魔理沙ともう一人知らない奴がいた。

「くあく……………おはようさん。」

「もう、夕方よ。Sansさん。貴方一応店主でしょ？寝ていいの？」

「どうやら、夕方まで寝ちまったようだ。」

「誰のせいで寝不足だと思ってるんだ？」

「う……………」

「まったく……………後ろにいるのは誰だろう。」

「あ……………お前さん、名前は？」

「後ろの奴に質問する。」

「初めましてSans。魔理沙から話は聞いてるわ。」

「私は、アリスよ。「アリス・マーガトロイド」。」

「OKアリス。これから宜しくな。」

「ええ。宜しく。」

「アリスは、常識人っぽいな。」

「Sansさん。私達、人里に来たついでにご飯を食べに来たのよ。」

「へえ〜。」

「だから、ホットドッグを売ってくれない？」

「あいよ。んでいくつだ？」

「3つ。頼むぜ！」

「ハツハツへ…… 毎度あり。」

じゅっぷんじ

「ホットドッグ3人分、お待ちどうさん。」

「おー！旨そうな匂いだな！早速いただきまーす！」ガブツ

「んん??流石Sansさんね。美味しいわ。」モグモグ

「本当に美味しいわね。今度教えてくれないかしら？」

「おう、ありがとうよ。それとアリス、悪いがこいつは企業秘密でな。」

「そう。残念だわ。」モグモグ

皆、本当に旨そうに食うよな。

「Sansさん、売上の方はどうなの？」モグモグ

「OPENしたばかりだからか、あまり良くないな。」

そう、あまり売上が伸びていないのだ。たまに買っていく奴はいたが、それきりだ。

「だったら、宣伝したらどうだ？」 ガブガブ

魔理沙が言う。

「宣伝ねえ……。」

やってみる価値はありそうだな。

「まあ、何にせよ今日はもう店じまいだ。明日にするよ。」

「あら、じゃあ私達が今日最後の客だったのね。」

アリスが言う。

「まっ…… そういうことだ。(ふわくあ)」

正直、まだ寝足りない。

「ふうく。ご馳走さん！ 旨かったぜ！」

「ありがとう、Sansさん。美味しかったわ。」

「そうね。また来るわ、Sans。」

「はいよ。今日はツケといてやるから、次からちゃんと金持ってこいよ?」

「あちやくばれてたか。」

「当たり前だ。」

小屋から出て鍵をかけ、霊夢達と一緒に歩いていく。

「霊夢。オイラ帰ってからすぐに寝るから、飯は要らねえわ。」

「ええ、分かったわ。」

「あつ、あと、明日の朝ごはんは卵焼きで頼む。」

「はいはい。少し甘めの奴で良いのよね？」

「流石。よくわかってらっしゃる。」

「だてに一緒に暮らしていないわ。」

二人でご飯について話していたら、

「何か夫婦みたいだな。お前ら。」

魔理沙が爆弾を投下した。

「ブフツ！… なにいつてんのよ!? / / /」

「あら?でも端からみたら、そう見えるわよ?」

「霊夢が嫁さんか……………悪くないな。」

「!?… … Sansさんまでなに言ってるの!」

「思ったことをそのまま言っただけだぞ?」

「ヒューヒューw お熱いねえ?お二人さん。」

「夢想封印!!」

「逃げろんだヨオオオオ!」

「コロスウ………… アイツは殺さないと… 駄目だあ!!」

こんな感じで騒がしい一日は過ぎていく。

時をおなじくして、

「パチエ? 準備の方は、大丈夫?」

「ええ、問題ない。いつでもいけるわよ、レミイ。」

「咲夜も美鈴も心構えをしておきなさい。明日に備えてね。」

「私に死角はありません、お嬢様」

「私だって頑張りますよ!」

「フッフ… 上々だわ。」

明日、ついに幻想郷が我々の物になる。楽しみだな。」

〈地下室〉

「……………」ギョツ

クマのぬいぐるみ」

「……………」グググググッ

クマのぬいぐるみ「パァン！」ハレツ

「お姉様……………」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

紅霧異変

1 2 紅き異変の幕開け

S a n s 「くうく……。」 Z Z Z

霊夢 「むにやむにや……。」 Z Z Z

魔理沙 「おーーーーーきーーーーろーーーー!!」

S & a m p ; 霊 「!?!」

魔理沙 「いつまで寝てんだ!この怠惰巫女!!」

霊夢 「なによ、魔理沙。こんな朝っぱらから。」

魔理沙 「朝っぱらじゃねえ!もう11時だ!」

霊夢 「あら、もうそんな時間だったのね。S a n s さん、今の話聞いてた?」

S a n s 「ぐう……。」 Z Z Z

魔理沙「寝るな!!」スパーン

Sans「イツテエ!何で叩くんだよ。」

魔理沙「お前が二度寝するからだろ!」

Sans「へへっ:~: 甘いな魔理沙。オイラのは、三度寝だ。」

魔理沙「そんなことはどうだっていい! 霊夢!外を見てくれ!」

霊夢「外?何?雨でも降ってんの?」

魔理沙「いいから見ろ!」

霊夢「はいはい。」シヨウジアケル

外には赤い霧が広がっていた。

霊夢「これは:~:~:~:。」

魔理沙「ああ、霊夢コイツは〔異変〕だぜ!」

Sans「これが:~:~:~:〔異変〕か。」

異変については、霊夢から事前に聞いていた。

霊夢「この霧:~: 魔力の類いね。普通の人間には厳しいかもしれないわね。」

魔理沙「そうなんだよ。だからこの異変を解決しに行こうぜ!!」

霊夢「分かったわ。Sansさんも来てね。」

Sans「へいへい。仰せのままに。」

魔理沙 「よし！そうと決まれば早速行くぞ！」

Sans 「どこに行くんだ？場所が分かるのか？」

魔理沙 「いや、霊夢の勘だよりだぜ。」

Sans 「勘って…… 大丈夫なのか？」

魔理沙 「大丈夫だ！霊夢の勘は恐ろしくくらいに当たるからな！」

Sans 「問題ないなら、別に良いんだが。」

霊夢 「…………… 向こうね。霧の湖の方角よ。」

Sans 「そいつも勘か？」

霊夢 「ええ。勘よ。」

魔理沙 「Sansは飛べないから、私の箒の後ろに乗りな！」

Sans 「はいよ。」 ホウキマタガル

霊夢 「準備はいいわね？行くわよ！」

そう言つてオイラ達は、飛び出した。

Sans 「いやーいい気分だな。これで晴れてれば最高だったんだが。」

魔理沙 「……………」

Sans 「おつ、人里が見えたな。手振ったら振り替えしてくれねえかな？」

魔理沙 「……………」

Sans 「あつ、慧音が振り替えしてくれた。」

魔理沙 「……………」

Sans 「どうした？魔理沙」

魔理沙 「い……………いや……………な……………何で」

Sans 「何？オイラ良く聞こえねえな。」

魔理沙 「だ……………だから……………何で」

Sans 「ぱーどうん？」

魔理沙 「何で私を抱き締めてるんだよ！／／／

オイラは今箒の後ろに乗って、魔理沙の脇腹に腕を通して抱きかかえるようにしている。

Sans 「何でって、落ちるじゃねえか。」ギュー

魔理沙 「他にやり方あったろ！何でよりにもよってコレなんだよ！／／／

Sans 「嫌だったか？」

魔理沙 「え？あ、い……嫌じゃないけど。」

Sans 「なら、別に良いじゃねえか。」ギュー

魔理沙 「うう……。／＼／＼」

霊夢 （あれ？私、空気？）

??? 「ほっほっほっ、ほつとどつぐー。ほつとどつぐでほつとどつぐー。」
ん？聞き覚えのある声と歌だな。

霊夢 「あら、ルーミアじゃない。何してるの？」

ルーミア 「別に何もしてないよー。ただウロウロしてただけ。」

魔理沙 「なんだか久しぶりに会った気がするぜ！」

ルーミア 「そうだね。魔理沙は久しぶり。」

Sans 「逆にオイラは、奇妙な縁があるみたいだな？」

ルーミア 「ん？あつ！Sansだ♪」

Sans 「ああ。Sansさんだぜ。」

ルーミア「んー？Sansは、魔理沙の箒の後ろに乗って何してるのかー？」

Sans「この霧を止めに行くんだよ。」

ルーミア「へえー、そーなのかー。」

霊夢「ええ、だからあまり時間がないのよ。」

Sans「悪いな。また今度構ってやるから。」

ルーミア「分かったのだー。Sans帰ってきたらほつとどつぐね？」

Sans「へいへい。わかってるよ。」ナデナデ

ルーミア「ふにゅ〜♪」

何かコイツ、小動物みたいだな。

く霧の湖く

霊夢「さて、ついたけど……………明らかにあそこよね。」

魔理沙「ああ。間違いないぜ。」

そこには「私が犯人です!」というような、怪しい館があった。

Sans「100%……………いや、200%あそこだな。」

霊夢「早速行きましょうか。」

館に向かって飛ぼうとしたとき、

「ちよおつと待ったあ!!」

S & a m p ; 霊 & a m p ; 魔 「?」

この声は、

チルノ「ここから先に進みたかったら、さいきよーのアタイを倒してからにしな!」

大妖精「チ……………チルノちゃあーん。」

Sans「おー。ししよーと、大妖精じゃねえか。」

チルノ「あつ!Sans!久しぶr「マスタースパーク!!」

皆まで言わせず、魔理沙が吹き飛ばした。

チルノ「やな感じー!」キラッ

大妖精「チルノちゃあああああん!!」

霊夢「アンタ本当に容赦ないわね。」

魔理沙「倒して行けと言ったから倒したただけだぜ？」

Sans「にしたって限度つてもんがあるだろ。」

魔理沙「まあまあ、細かいことは気にしないでさっさと行こーぜ！」

霊夢「そうね。行きましようか。」

今度こそ、オイラ達は館の方に飛んでいった。

t o b e c o n t i n u e d

1 3 門番に魔法使いに瀟洒な従者

オイラは、今館の前でどうしようかと悩んでいる。

何を悩んでいるかと言うと……………

「スピー……………スピー……………」ZZZZ

おそらく門番であろう奴が気持ち良さそうに居眠りをしていた。

あんまり気持ち良さそうに寝るもんだから、起こしたら悪そうだし、かといってそのまま無視して通るのも何か違う気がするし。

「どうする?…」

「倒す。」

「お前さんらに感情は、無いのか?悪いが、オイラにはできそうにない。」

だってあんなに朗らかな笑顔で寝ている。はなちようちんまで出して。

「でも、倒さないと先に進めないじゃない。」

「そうだぞ!それに、敵に情けは無用だ!」

魔理沙はすでに八角形の物体に力を込め始めている。

「OK、それじゃあ……………オイラがやっつくから、お前さんらは先に進め。後から追いかけて」

るから。」

「分かったわ。サボって先に帰らないでね。」

「heh… heh… heh… ソイツは断言できねえな。」

「Sans(さん)?」ゴゴゴ

「怒るなよ。いつもの軽いジョークじゃねえか。帰らないから、早く行けよ。」

若干不満そうにしながら、霊夢達は館の中に入っていった。

「……………さて、やるか。」

♥?ACT

♥?調べる 起こす

紅 美鈴 : ATK48 DFE54

* 紅魔館の門番 いつも眠っている

「むにやむにや…… 咲夜さん、頭はやめてください。」 Z Z Z

調べる ♥ ? 起こす

* 美鈴の肩を軽く揺すってみた…… 効果は無いようだ。

* 美鈴の頬をつねってみた…… 効果は無いようだ。

* 大きな音をたててみた…… 効果は無いようだ。

* 美鈴を普通に起こすのは、完全に不可能のようだ。

「h m m…… 少し良心が痛むが、仕方がない。」

* 骨で美鈴の頭を強めに叩いた。カコン！という音があった。

「痛あああああい！」

「ごめんなさい咲夜さん私が悪かったですだからナイフはやめてくださいいい！」

*美鈴は目が覚めたようだ。

♥? MERCY

♥? 見逃す 逃げる

*You Win!!! OExpと10Gを手にいれた

「あー…… オイラは、そのさくやって奴じゃねえぞ？」

「へ?…… あなたは？」

「オイラはSans。ただのしがないコメディアンさ。」

もう、この挨拶が恒例行事だ。

「Sansさん……ですか。あつ……私、紅 美鈴と申します。」

「そうか……。美鈴。寝起きのところ悪いが、ここの主のところに案内してくれないか

？」

主と言った瞬間に美鈴は構えをとり、殺気を飛ばしてきた。

「お嬢様になんの用ですか。」

「いや、この霧が邪魔だから取っ払ってもらおうかと。」

「駄目です。お引き取りください。」

「そうは言っても、オイラの連れ二人がもう中に入ってるんだ。」

「え!?!… いつの間に…。」

「やたら神妙な顔してるが、お前さんさつきまで寝てたんだぞ?」

「…………… あっ……………」

「どうした?」

「あああああ!!! 咲夜さんに怒られる!!」 ガタガタ

よつぽど さくや って奴が怖いのか顔を青ざめさせて小刻みに震えている。

「あー… お前さんの上司には、言わないでおいてやるよ。」

「本当ですか!?! 約束ですよ!?!」

「ああ、言わないよ。だから代わりにここ通してくれないか?」

軽く涙目じゃねえか。どれだけ怖いんだ、さくや って奴。

「ありがとうございます!…。」 と言いたいところですが、今は、貴方とは敵同士。ここを

通すのは別の話です。」

「やっぱり簡単にはいかねえか。」

「通るなら、私を倒してごらんなさい！」

..... 私を倒して..... ね、

「..... その言葉、「後悔」すんなよ？」

魔理沙視点

Sansと別れたあと、霊夢とも別行動をとることになった。今は、館内を適当にブラブラしている。

「お？この扉はなんだ？」

一つだけデカイ立派な扉がある。私は、その扉をゆっくり開けた。

「おっ!!こりやスゲエ!!宝の山だぜ！」

そこにはアホみたいにデカイ図書館があった。棚には本が溢れんばかりに入っている。

「こんだけ沢山あるんだ。一つ位拝借しても問題ないだろ。」

「問題大有りよ。」

奥から気だるげな声が聞こえてきた。

「この本は、大切な物なの。盗まれては困るわ。」

紫色のパジャマのような物を着た女が出てきた。

「盗むんじゃないよ。ただ死ぬまで借りるだけだぜ。」

「それを盗むと言うのよ！この泥棒ネズミ！」

そう言うのと紫色は、私に弾幕を発射してきた。

「誰が泥棒ネズミだ！私は、霧雨 魔理沙だ！良く覚えておけ、この紫もやし！」

「私は、パチュリー・ノーレッジ。そっちこそ良く覚えておきなさい！」

霊夢視点

「無駄に広いわね、この館。」

私は館の廊下を歩きながら、主を探していた。

Sansさんに門番を任せたと、何故か魔理沙とも別行動をとることになった。

魔理沙曰く「効率重視だぜ！」らしい。

それにしてもこの館いくらなんでも広すぎる。外から見るとよりも広く感じる。おまけに壁一面真っ赤だから、目に毒だ。

「悪趣味な館ね。」

「あら？ 私はそうは、思いませんわ。」

いつの間にも後ろにいたのかしら。さつきまで誰もいなかったはずだけど。

「アンタは？」

「私は、十六夜 咲夜。この紅魔館のメイド長をしています。貴女はこの館になんの御用で？」

咲夜は、瀟洒にスカートの手端をつまんでお辞儀を見せて。

「私は、博麗 霊夢よ。「博麗の巫女」名前は聞いたことあるでしょ？ 私達は、この霧を止めに来たのよ。だから、アンタが主のところまで案内してくれたらとても助かるん

「だけど?」

「みすみす自分の主を危険にさらすような真似をするわけがないでしょう?…でも、そうね…私を倒したら、なんてどうかしら?」

キラリと光るナイフをちらつかせている。

「はあ…どういつもこいつも強情な奴ばかりね…良いわ、相手してあげる。」

「僭越ながら、お相手させて頂きますわ。」

t o b e c o n t i n u e d

#14 巫女とメイドつて真逆じゃない？

霊夢視点

BGM 月時計 ルナダイアル

さてと、面倒な事になったわね。

「これでも食らいなさい！」

幻幽「ジャック・ザ・ルドビレ」

咲夜がそう宣言すると、大玉弾幕が飛んできた。

このくらいならまだ余裕ね。

軽く避けようとしたとき、気がついたら目の前に大量のナイフが迫っていた。

「!?……………いつの間に!……………」

なんとか避ける事が出来た。

「……………本当なら、今の一撃で倒すはずだったのに。流星は「博麗の巫女」といった

所でしょうか……………」

どういうこと？

何も無かった場所から突然沢山ナイフが飛んできた。

能力の類いかしら……………」

「……………これは、厄介ね。」

なんにせよ面倒くさい相手なのは、良く分かったわ。

夢符「封魔陣」

大量の弾幕を展開する。しかし、まるで瞬間移動のようにして弾幕を避けられる。

いったいどんな能力なのかしら……

そう思案していると、私のスペルの効果時間が切れた。

「あら？もう終わりかしら……なら、今度はこっちの番ね。」

幻世「ザ・ワールド」

今度は最初からナイフが飛んできている。

避けようとする、急にナイフの向きが変わった。

「……くっ……！」

お祓い棒でナイフを弾く。だが、対処しきれない。

さつさと咲夜の能力を特定しないと……

「はっ……やあっ！」

咲夜がまたナイフを投げってくる。

「……」 チラッ

？ 今一瞬、懐中時計を見た？

その瞬間にナイフの向きが変わった。
今度は対処することが出来た。

一瞬…………… 瞬間移動…………… 懐中時計…………… はっ！

成る程ね。これなら今までの攻撃にも領けるわ。

「…………… アンタ…………… 時間を止めてるでしょ？」

「!?…………… 正解よ。だが、能力が分かったからといって、避けられるとは限らない!!」

ナイフが迫っているが、一度タネが分かっただけで済めば、簡単だ。時計を見るタイミン
グに合わせて、避ければ良いのだから。

「無駄よ。能力がばれた時点で、アンタは負けたの。」

そう言つて、体を捻りながら避けていく。

「そんなこと!!……………」

怒っているのか、さつきよりもナイフの投げ方が大雑把だ。

避ける。 避ける。 避ける。

メイド秘技「殺人ドール」

大量のナイフが飛んでくる。普通の人が見たら発狂ものだが、弾幕に慣れている私からしたら別に大したことはない。

「これなら、まだ魔理沙のほうが避けにくい弾幕使ってくるわよ。」

「うるさい！これでも食ら……！！ナイフが……」

「どうやら、ナイフ切れのようね。」

「くっ……！！」シュンッ

私の攻撃を警戒して、咲夜が跳んでいった。

しかし私もバカではない。

「!?……こ……これは!?動けない！」

「予め私が罠を張っておいたわ。そこには私の術式が書かれてる、並大抵の奴じゃ解除出来ないわ。」

私は咲夜にお祓い棒を向けながら、言った。

「ここまでよ。十六夜 咲夜。」

「……………私の……………敗けです。」

やっと終わったわね。

私は、咲夜の術式を解除する。

「じゃあ、異変の主犯の所に案内してもらおうかしら？」

「敗者に権利は無いものね……………。コツチよ、ついてきて。」

咲夜の後ろについていく。

くそ長い廊下を渡りきつて、ようやくまともな部屋の前まで来た。

「いくらなんでも、長すぎじゃない？」

「お嬢様のワガママでね……………」

成る程、コイツもなかなかの苦勞人ね。

「……がお嬢様の部屋よ。」

目の前に真つ赤な扉がある。

本当に趣味が悪いわ。

私は部屋の扉を開けた。

扉を開けた瞬間、物凄い轟音とともに弾幕が飛んできた。

なんとか避けた。

「ちよつと！ 客人にむかっていきなり弾幕飛ばしてくるなんて、どういう神経してん……………よ。」

館の主とおもしき人物が睨んでいる。だが、その視線は私に向けられてはいない。

一定の距離で主から離れている、男に視線が注がれている。

「どうした？そんなもんか？」

「うるさいわね！まだ私は、本気のほの字も出してないわ！」

主とおもしき人物はピンク色っぽい服を着て、同じ色のナイトキャップのような物を被り、背中からは羽が生えた幼女だった。

だが、男の方には見覚えがあった。というか見覚えしかない。

「ん？…おっ。遅かったな霊夢。」

「な…：…なんで、Sansさんがここにいるの!？」

主が射っている弾幕を避けながら、Sansさんが話している。

「なんでって…：…来たからとしか…：…」

「なんで当たらないのよ!!!」

主の声が響いた。

t o b e c o n t i n u e d

#15 攻撃は避けるもの お嬢様は煽るもの

く 霊夢と咲夜が戦い始める10分程前く

S a n s 視点

「せやつ!!」

かけ声とともに美鈴が蹴りを放ってくる。

「おっと。」

M I S S

オイラは体を右に反らして蹴りを避ける。

「危ないな……。お客を蹴るとは、どういうことだ？」

「……。先程も言いましたが、今は敵同士です。それに、貴方はお客様ではなく「侵入者」です。」

今度は、左フックが飛んでくる。

M I S S

そのまま左の裏拳。

M I S S

続いて右の回し蹴り

M I S S

「どうして避けてばかりなんですか！反撃してきなさい！」

「オイオイ……こう見えても避けるので精一杯なんだぜ？」ニヤニヤ

「そのニヤニヤ顔を止めてください！」ブンッ
「ハッハッハッ……悪いな。元々こういう顔なんだよ。」MISS

そんな会話(?)をしながらも、美鈴が放ってくる攻撃を避け続けること数分。

「はあっ…… はあっ…… な……… なんで一発も当たらないの？」

「オイラ避けるのだけは得意なんだよ。」ニヤニヤ

いつもより、ニヤニヤ度20%増し位で美鈴に言う。

「……… さてと…… お前さんとの勝負も楽しかったが。生憎、オイラには時間が無くてな。起きてすぐで悪いが、眠っていてもらうぜ？」

「な…… 何を……」

「ほい。」ポカン

起こした時と同じように、美鈴の頭を強めに骨で殴った。

「PAD長!!」ガクッ

美鈴が訳のわからん事を言いながら倒れた。

「……… なんか悪いことした気分だ。」

オイラは、館の中に入っていった。

「なんじゃこりや… 目に悪いな。」

館の中はどこもかしこも真つ赤だった。

「骨に目が有るつてのも可笑しな話か……」

とりあえず、廊下に沿ってウロウロしている。

何回か妖精が来たが、オイラを見るなり何処かに逃げてしまった。失礼な奴らだな。

こんなにハンサムな顔を見て逃げるだなんて。

「おつ、……か？」

そこには他とは違う立派な大きい扉があった。

「…… ノックしたほうがいいよな？」

もしかしたらジョークが好きなオバサンが出てくるかもな？

コンコン

「入りなさい。」

思ったより幼い声が返ってきた。

それを合図に重い扉を押し開ける。

中を覗くと、翼の生えた幼女がいた。

「おっ。こりやあ驚きだ。てつきりオバサンが出てくるもんだと思ったが。」

「オバ……！……貴方、名前は？」

「他人に名前を聞くときは、自分から先に名乗るもんだぜ？」

「私はレミアア・スカーレット、吸血鬼にしてこの館の主よ。」

「オイラはSans。ただのしがないコメディアンさ。」

「そう……。Sans、早速で悪いけど死ぬ？」ゴゴゴ

「へへへ……ジョークにしちやあ笑えないぜ？」

「私は本気よ？」ニコニコ

すると、レミアアは突然首もとに赤い槍を向けてきた。

「人に武器を向けるなって習わなかったのか？」

「あら？ 私の目の前には「人」なんていないのだけど？」

「おっと、こりや失礼。ここには「オイラとお前さん」の「化け物」二人しかいなかったな？」ニヤニヤ

「(ムカツ)：：言ってくれるじゃない。」

レミリアが宙に浮かび、魔方陣を展開した。

「：：：：楽に死ぬると思わないことね。」ゴゴゴ

霊夢
視点

「つて事があつたんだよ。」MISS

「キィッツ!! いい加減当たれ!」ビュンビュン

Sansさんが主、もといレミリアの弾幕を避けながら事の経緯を説明してくれた。

「……………イロイロと突っ込みたい所だけど、まあ良いわ。」

「heh…助かるぜ。」MISS

「……………大丈夫なの?その状態。」

「いや、そろそろ疲れそうだ。」MISS

「ムキ~~~~~!!!」

「お嬢様……………あ!頃のカリスマはいつたい何処へ……………」ポロポロ

t o b e c o n t i n u e d

1 6 「親友」

くヴワル魔法図書館く

「マスタースパーク!!」

虹色の光が図書館全体をつつむ

ズドーーーーン!!

「むきゅく」ガクツ

「パ…………パチュリー様ああ!!」

ふう………… やつと終わった。長かったぜ。

あの紫もやし、なかなか腕の立つ魔法使いだったな。
少し危なかった。

「まつ、なにはともあれ、私の勝ちだな!!」

「うう………… 強い………… 貴女みたいな奴がいたなんて。」

「お前も結構強かったぜ！だが、私の方が上だった。ただそれだけだ!!
というわけで、私はこの本を幾つか借りてくぜ！」

「どういうわけよ!! 待ちなさ…ゲホッゲホッ!!」

「パチュリー様！大丈夫ですか?!」

「ゲホッ…ゲホッ…平気よ。ありがとう小悪魔。」

急に咳き込み始めたな。

「どうした？大丈夫か？」

「パチュリー様は、持病の喘息を患っているんです！」

コイツ喘息持ちだったのか。

「こりやすまないことをしたな。悪かった。」

「そう思うなら、本を返して出ていきなさい。」

「それとこれとは話が別だぜ！あばよ！」ピューン

「あつ！待ちなさ〜い！」

パチュリーの声を無視しつつ、私は図書館を後にした。

「なんだこれ！」

私は目の前の光景を見て愕然とした。

壁が荒れて、カーペットはグチャグチャ、終いには至るところにナイフが突き刺さっている。

「…………… ははくん、さては霊夢だな？」

壁の傷跡がまだ新しい。どうやらさつきまでここで弾幕ごっこをしていたらしい。アイツもアイツで、だいぶ容赦ないな。

それから少しさまよっていたら、いつの間にか立派な扉の前に出ていた。

「ここだな？ よーし、一番ノリイイイ！！」ガチャン

そうやって勢いよく扉を開けた。

「おつ、遅かったな魔理沙。」

骨が私を出迎えた。

「あつ！Sans！もう来てたのか！」

「ああ。ちなみに霊夢ももう来てるぜ。」

「ナニイ!!?... つまり..... 私がビリか.....」

「はあく... んで、肝心の霊夢はどこだ？」

「あそこ。」ユビサス

Sansが指差した方向を見ると、霊夢と幼女が弾幕ごっこをしていた。

「なんだあれ。どういう状況だ？」

「簡単に言うと、

俺、主犯煽る

??

主犯、キレて弾幕を射ちまくる

??

流れ弾で霊夢ピチューン

??

霊夢「ここがお前の死に場所だア！」

??

弾幕ごっこ ◀？イマココ

って感じ。」

「お前のせいじゃねえか！」

「ハツハツハツ……さあて、オイラ達暇になったぞ。どうする？」

確かに暇になったな。弾幕ごっこの手助けは私のポリシーに反する。

「〜♪」

Sansが鼻歌をしだした。聞いたことない曲だな。

「それ、なんて曲だ？」

「さあな……雨に濡れた石像に傘でもささしてやれば聞こえるんじゃないか？」

何をいつてんだコイツは。

「〜♪」

ちよつとだけ、悲しい曲調だ。

「でも、いい曲だな……」

ふと、この曲を聞いていたらSansに聴いてみたくなった。

「なあ、Sans。」

「ん？どうした？」

「お前は、今、「幸せ」か？」

「それは、どういう意味だ？」

「ここに……幻想郷に来て、幸せか？」

「……………」

「こう言っちゃなんだが、お前はいつもわらってるよな？……………私は、お前が心から笑っているのは見たことがない。」

「……………」

「……………前の所に帰りたいか？」

「……………どうなんだろうな。」

「へ？」

「オイラには前の場所の方が合ってるような気がする。」

「!!」

「ここは、歩いていたら弾幕が飛んでくるし、止まっても勝負を持ち掛けられる。はつきり言ってほぼ無法地帯みたいなもんだ。」

「……………そうか……………」

「だけど、」

「？」

「そんな無法地帯が、居心地が良くなりつつあるのも事実だ。」

「だから……………そうだな……………オイラは、」

「!!……………そうかそうか!……………良かったよ。」

「あ……………柄にもないこと言っちゃった。」

「……………」

Sansは、頭を押さえて若干後悔している。

そのとき、

「夢想封印!!!」

ズドーーーン!!

霊夢のかけ声と轟音が響いた。

「…………… どうやら終わったみたいだな。」

Sansが言う。

「だな…………… んじゃ！さつきと行って片付けようぜ？」

「親友」。

「!!!…………… heh… heh… heh「親友」か… 良い響きだな。」

そう言いながら私達は、霊夢のもとへ歩きだした。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

#17 狂気の少女

Sans視点

「霊夢、お疲れさん。」

「ええ、ありがとう。…… あら、魔理沙いたのね。」

「ああ、さつき来たんだぜ！」

「でも一足遅かったわね。もう主犯は倒したわ。」

「つてことは…… 異変解決だな！」

「まあ、そうなるわね。」

「これで外の霧が晴れるな。」

「うー☆ 負けちゃったわ……………」

「お嬢様……………」

「………… 仕方ないわね。咲夜、パチエに霧を止めるように言いなさい。この異変は、私達の敗けよ。」

「かしこまりました。」

レミリアがそう言うのと、咲夜が一瞬で消えた。
便利だなあ。

「ぱちえ？ぱちえつてのはパチュリーの事か？」

「……………そうだけど…………… 貴女は？」

「私は、霧雨 魔理沙！これから宜しくな！」

「私は、レミリア・スカーレットよ。」

魔理沙とレミリアが互いに自己紹介をすると、

「良い機会だから、私も自己紹介しておくわ。」

私は、博麗 霊夢よ。宜しく。」

霊夢も自己紹介を شدした。

「ええ、宜しく。」

「……………これってオイラもやった方が良いのか？」

「貴方はもう知ってるから、言わなくて良いわ。」

そりやそりだ。

「ちなみに、さつき消えた私のメイドは「十六夜 咲夜と申します。」

レミリアが紹介しようとするのと、咲夜が食いぎみで自己紹介をした。

「咲夜、もう霧は止めたの？」

「はい。パチユリー様に報告をして参りました。」

「流石ね。それでこそ私のメイドだわ。」

「もったいない御言葉です。」

ほく。これが主従関係っていうものか。

「うん？ 魔理沙、その本どうしたの？」

霊夢が魔理沙に問う

「ん？ これか？ コイツは図書館からちよつと借りたんだぜ！」

「アンタのちよつとは、ちよつとじゃないでしょ……。」

「お前さん、泥棒したのか？ 駄目だぜ？ 盗んだりしたら。」

「盗んだんじゃない！ ただ死ぬまで借りるだけだぜ！」

「そうか。それならなんの問題無いな。」

「だろ？ やつぱりSansは、話が解る奴だぜ！」

「h e h . . . h e h . . . h e h、だてにスケルトンなんかやってないぜ。」

「大問題よ！」

少し低めの女声が聞こえてきた。

「ん？ 誰だ？」

後ろを見ると、紫色の服を着て紫色の髪をはやした奴がいた。

「なんだ？もやしか？」

「奇遇だな、私にももやしに見えるぜ！」

「貴方達は、目が腐ってるのかしら？」

まあ、それはそうとして、魔理沙が持っているその本は私のよ！返しなさい！」

「断るぜ！」

「断る。」

「断るわ。」

何故かレミリアが便乗してきた。

「レミイ！貴女までそっち側だったのね。」

「冗談よ。魔理沙その本を返しなさい。」

「えー、私まだ1ページも読んでないんだぜ？」

「駄目だ。返すんだ魔理沙。」

「あつ！Sansお前！裏切ったな！」

「お？いつオイラがお前さん側に付くっていった？」

「友達の味方にはなってるもんだぜ？」

「友達を正してやるのも仕事だ。」

屁理屈では、負ける気がしねえ。

「……………だつて、読みたいんだもん。」
「急にしおらしくなるなよ。」

脇（あれ？また私空気？）

冥土（安心しなさい。私もよ。）

脇（コ…コイツ…直接脳内に!!）

とかなんとか談笑していた。
すると突然。

ドゴーーーーーン
ドゴーーーーーン
ドゴーーーーーン
!!!!!!!

「!?.....なんだぜ!?」

「おつ。大きい地震だな。」

「どう考えたって地震じゃねえだろ!馬鹿S a n s!」

ドカーーーーー
!!!!!!

床がぶつ壊れて、ドでかい穴が出来た。

そこから、

一人の女の子が出てきた。

その女の子は赤い服を着ていて、金髪で、背中に不思議な羽が生えた奴だった。

「アハハッ！やあつと出てこれた。」

ソイツはねつとりと笑った。見たものをビビらせる顔で。

「フラン!!何故勝手に出てきているの!さっさと地下に戻りなさい!」

「嫌だヨ、お姉さま。私マだ出てきたバツかりだモン。」

「いいから早く戻りなさい!!」

「モウ、うるさいなア!私はたダ遊びたいだけなノに!!」

フランが手をかざすとデカイ炎の剣のようなものが現れた。

フランがレミリアに斬りかかる。

「聞き分けのない子供には、お仕置が必要ね!」

レミリアは、赤い槍を出して抵抗する。

「アツハハハ!!壊レちゃエ!!」

剣と槍が交差する度にものすごい力の波が押し寄せる。

「これは、不味いわね。急いで避難するわよ!

咲夜!!すぐに小悪魔と中国を連れてきなさい!」

「かしこまりました!」 シュンツ

咲夜が一瞬で消える。

「他のも急いで館の外へ！」

もやしがり呼び掛ける。

「聞いたでしょ!? 魔理沙、Sansさん、逃げるわよ!!」

霊夢が珍しく焦っている。

「合点承知の助だぜ！」

魔理沙が元氣いっぱい返事をする。

「……………」

「Sansさん? 何してるの? 早く逃げるわよ!」

「Sans! なにボーツとしてんだ! 逃げ!」

「……………」

オイラは、目を離せなかった。

「Sans!! いい加減に「同じだ」……………は?」

「……………」
「アイツ」と、同じ眼だ。」

鮮明に思い浮かぶ。

「アイツ」のことが……………鮮明に……………

「何を言つて、アイツつて誰だよ！」

「……………。」
「ザツザツザ

「オイ！馬鹿Sans！やめろ戻つてこい！」

「何してんのよ、魔理沙！」

「だって「時間がないのよ！逃げるわよ！」ま…待て！

まだ、Sansが……………」

ガチャン

霊夢と魔理沙が逃げていった。

オイラは、何をしてるんだろう？

ただ、「アイツ」に似てるっただけ……………

奥では、狂気に顔を染めながらレミアに攻撃を繰り返している奴がいる。オイラは、何故かこの状況で弟のことを思い出していた。

〈 snowdin 〉

「もうすぐだ！もうすぐ人間を捕らえることが出来る！」

「……………」

「そうすれば俺様は、晴れてロイヤルガードの隊長だ！」

「……………」

「ニエツヘツヘツ!!これでお友達もたたくさん出来るのだ！」

「……………」

「……………」 どうした？Sans。浮かない顔をして。そんなことでは、幸せ

さんが逃げてしまうぞ!!」

「……………」

「いつものくだらないジョークはどうした！お前らしくないぞ!!」

「.....なあ、兄弟。」

「どうした？」

「.....もし、.....もしもだぜ？.....もしもお前の会いたがってる、人間

が.....
「モンスター殺し」だったらどうする？」

「.....」。

「どうしようもないクズでも、変われると思うか？

誰でも努力さえすれば善人になれると思うか？」

「.....」。

「.....すまん、変な事聞いたな。忘れてくれ。」

「.....そうだな、俺様は.....」

「ん？」

「この世に本当に心の底から悪い奴なんていないと思う!!」

「……へえ。」

「……………」と、言いたいところだが、そうはいかないだろう。……当然、根つからの悪者もいる。本当の良い奴なんて僅かな一握りだけ。むしろ悪者の方が多いと思う。」

「……………」だろうな。」

「でも、俺様はそんな悪者でも変われると思う。」

誰かが「良くない道」に進もうとしているなら、それを正してやるのが、良い奴の仕事だと思うな。」

「……………」!

「そして相手を正すためには、相手を信じなければいけない。だか

ら、.....

もしも、人間がモンスター殺しだったら俺様がソイツを信じて、ハグをして、正しい道を進ませるんだ!!」

「..... h e h : : そうだ、お前はそういう奴だったな。」

「ん？俺様、何かおかしな事言ったか？」

「いや。」

レミリア視点

「アハハハハハハハハ!! コワレロ! コワレロ!」

「くっ…… くそっ……」パキーン

とうとう私のグングニルが壊れた。

「じゃあ、バイバイ、お姉さま♥?」

フランの剣が振られる。

……
……ここまでね。

「……………ごめんなさい。私では、貴女を救えなかったわ。」ポロポロ
せめて誰かが、彼女を救ってくださいように。

そう願いながら、目を閉じた。

ズバツ

？

おかしい……いくら待っても来るはずの痛みが来ない。

恐る恐る目を開ける。

「いったい何が……え!？」

目の前には、何本もの巨大な骨があった。
どうやらこの骨がフランの攻撃を防いだようだ。

「…………… どうしようもないクスでも変われる方法がある。

誰かが「良くない道」に進んでしまいそうなとき、正す方法がある。

それが分かるか？レミリア。」

後ろから低い声と足音がする。

「オイラのCOOLな弟は、ソイツを信じてハグをすると言った。

馬鹿げてる。そのときは、そう思った。その結果 弟は殺され、オイラは、ソイツに復讐をした。」

間違っていたよ。それじゃあソイツと何ら変わらない。」

「だから…………… お前は間違えるな。

アイツを信じて、ハグをしてやれ。

そのお手伝いなら、

「俺」がやってやる。」

彼の… Sansの眼は、まるで宝石のように蒼く輝いていた。

t o b e c o n t i n u e d

1 8 「忍耐」

レミリア視点

「…………… て… 手伝うって… どうするの?」

「なーに、簡単な話だ。…………… 俺がアイツを行動不能まで追い詰める。… そしたら、後はアンタの仕事だ。」

「?…………… あなたは誰?」

フランがSansに問い掛けた。

「俺は、Sans。ただのしがらないコメディアンさ。」

…………… とくろでお前さん。…………… さつき遊びたいとか言ってたな?」

「そうだよ! 私は、遊びたいだけなの!」

「おー、奇遇だな。実はな俺も今遊び相手を探してたんだよ。」

「本当!…………… なら、私と遊ぼうよ!」

フランは無邪気にSansを誘う。

いつの間にかSansの眼は元に戻っていた。

「良いぜ？何して遊ぶ？」

「弾幕ごっこで遊ぶよよ！楽しいよ！」

「よし、早速やろうぜ？楽しい事は、大好きなんだ。」

Sansは、意味が分かって言葉を発しているんだろうか？

「Sa... Sans... やめなさい！死ぬわよ!？」

「おー。出会い頭に槍向けてきた奴のセリフとは思えねえな。」

「お姉さまは黙っててよ!!」

フランが私を睨む。

「... Sans! あんな奴、放つといて早く遊ぶう！」

ズキッ

「あんな奴...」

私は、フランから出た言葉を呟く。

「さっさとやろうぜ。」

「Sans?早く始めよーよ。」

「..... ああ、そうだな。」パチン

Sansが指を鳴らした。

「.....」

靈夢視点

「だから、さつきからそう言ってるじゃねえか！」

「なんで一緒に連れてこなかったのよ！アホ魔理沙！」

「靈夢が無理矢理腕を引っ張ったからだろうが！」

「それをその時に言えばよかったですよ！」

「靈夢が私の話を聞かないのが悪いだろ！」

「落ち着きなさい！今は、喧嘩してる場合じゃないでしょう！」

熱くなった私達を咲夜が抑える。

今私達は館を出て、少し離れたところまで避難していた。

だが、そこで魔理沙がSansさんを置いてきたと言い始めたから口論になった。

「…魔理沙の話が本当なら……… Sansは、自分の意思で死地に向かったというわけね。」

咲夜がまとめる。

「ど……… どうでしょうか、パチュリー様……。」オロオロ

小悪魔が慌てている。

「そうね……… 妹様が暴れたら、いくらなんでも私達じゃ歯が立たないわ……落ち着くのを待ってから行きましょう。」

「なんでよ！そしたらSansさんが！」

「霊夢、聞いただろ？」

アイツは私達じゃあ手におえないような奴なんだと。

おとなしく待つてようぜ。

大丈夫だって！アイツは私と弾幕ごっこをやったとき、

スペルも使わないで乗りきったんだぜ？」

「そうだけど………。」

確かにそうだ。Sansさんは、スペカを使わずに全て避けていた。

………
待って………
どうしてS a n sさんは、あの時スペカを使
わなかったの？

スペカは、しつかりと作っていた。
なのに何故かそれを

魔理沙との弾幕ごっこに使わなかった。

本当に使わなくても余裕だったの？

いや、S a n sさんはレミアアの攻撃を避けていくうちに、「疲れてきた」と言ってい
た。

それ事態が嘘な可能性もあるが………
万が一、それが本当だとしたら………

S a n s
視 点

「S a n sさんは、
スペカを使えない？」

「B G M 「U .
N オーエンは彼女なのか？」」

「いっくよーー!!」

禁忌「クランベリートラップ」

フランスがスペカを宣言すると、紫色と赤色のデカイ弾幕が俺を囲むようにして展開された。

「おととつと。」

M I S S

俺は体を捻りながら避けていく。

♥ ? A C T

♥ ? 調べる

挑発

フランドール・スカーレット

: A T K 1 0 0 D F E 5 0

*レミリアの妹 495年間地下に閉じ込められていた

禁忌 「レーヴァテイン」

今度は炎の剣が現れる。

フランはそのまま斬りかかってきた。

M I S S

「スゴイスゴイ!! 楽しいよ!」

調べる

♥?挑発

「ソイツは良かった。だが、俺はまだ楽しくないな?」

ちよつと期待外れだぜ。」

「むっ……言つたなー!!」

*フランの射つ弾幕の速度と密度が上がった

「なら、これでどうだ!!」

禁忌 「フォーオブ ア カインド」

魔方陣が現れ、フランが4人に増えた。

「おー、スゲエ。」

「「避けられるもんなら避けてみる!」」

通常じゃ、ありえない量の弾幕が降ってきた。

「……………こりゃあ……………避けきれねえな。」

俺は避けれる奴を避けつつ、避けきれない奴は骨で防いだ。

「「レーヴァテイン!!」」

4つ重なった声が聞こえた。

「……………WAO……………」

フラン達がそれぞれ炎の剣を持って襲ってきた。

「食らえー！」

最初は、2人のフランが攻撃を仕掛けてくる。

M I S S M I S S

「んー？まだまだ避けられるぜ？」

「当たれー！」「当たってよく！」ブンブン

M I S S M I S S

避けられるが、はてさてどうしたもんかな…

フラン視点

全然当たらない！

なんでこんなに避けられるの？

しかも、Sans。まだ一回も攻撃してきてないし！

手加減されてるみたいでムカつく！！

「むー！！ 避けてばっかじゃつまんない！！」

「「「そうだそうだー！！」」」

「攻撃してこーい！！」

「「「してこーい！！」」」

私達が全員で言うと、

「……………分かったよ。」

こつからは、手加減は抜きだ。」

Sansの眼が蒼くなった。

「そうこなくっちゃー！」

もつと楽しくなりそう！

「…………… heh…………」パチン

Sansが指を鳴らすと、私達の胸の前に青いハートが出た。

「「なにこれ？」」

Sansが腕を振り下ろす。

それと同時に体の自由が効かなくなり、地面に叩きつけられる。

「「痛い!!」」

何が起きたかを考えようとしたが、

なにか本能に近いものが、「避ける」と訴えてきた。

私は本能に従い、急いでジャンプする。

次の瞬間、足元から大量の骨が生えてきた。

避けなかった分身達が、骨に突き刺され消えた。

今度は胸のハートが赤色になったかと思えば、横から大量の骨が流れるように飛んできた。

骨のウェーブを避けきり息を整えようとするが、複数の竜の頭のようなものに囲まれ、また本能のままに避ける。

すると、複数の竜の口から太い青白い光線が放たれた。

なんとか、避けきる。

「へっ……なぜ誰も最強の技を一番最初に使わないのか不思議でならない？」

おちやらけて言うSansが、何故か怖く感じた。

レミリア視点

私は目の前の光景に驚愕していた。

あのフランに対抗しているのもそうだけど、なにより
Sansがあそこまで強いことに驚愕していた。

「……………
凄……………」

それ以外の言葉が出なかった。

それと同時に、彼に少しの「恐怖」を覚えた。

普段は、のほほんとしているクセに戦いになると
まるで雰囲気が変わる。

ここまで分かりやすい「表」と「裏」もないだろう。

先程私はこっそり能力を使い、S a n s の運命を覗いた。

その運命では、私とフランとS a n s で楽しくお茶会をしていた。
フランも笑っていた。

狂った笑みではなく、見た目相応の少女のように。

あの通りの未来にするにはどうしたら良いだろう？

S a n s は信じてやれと言った。

だけど、今まで彼女をさけてきた私が信じられるのだろうか？
今まで手を差しのべなかつた私を彼女は信じてくれるのだろうか？

怖い。

もしもあの子に拒絶されたら、私は正気を保てる自信がない。

私は、どうしたら……………

(簡単だ!! 信じてくれるまでやってみろ!)

頭の中で聞いたことのない声が響く。

Sansよりもわりと高い声だ。

でも、どこか似ている。

(何度でも、何度でも試してみる。)

どれだけやっても諦めるな! 耐えろ!

まずは、姉として妹を応援でもしてやったらどうだ?

その後は、ハグをすればもう仲直りだ!

ニエツヘツヘツ!!)

*胸の奥で何かが輝いたような気がした。

「……………」

何を悩んでいるんだ私は……

私は、誇り高き吸血鬼！

最愛の妹一人救えずしてなにが夜の王だ!!

許してくれないなら、許してくれるまで！

認められないなら、認められるまで！

何度でも、何度でも！

耐える力、「忍耐」を奮わせろ!!

*私は「忍耐」で満たされた。

「……………
(スウツ)」

「フラーーーーン!!! 頑張れえええええええ!!!」

フラン視点

怖い、怖いよ。

今は、Sansが凄く怖い。

なんでかな、今頭の中で皆の顔が思い浮かんでグルグルしてる。

美鈴……

小悪魔……

パチュリー……

咲夜……

お姉さま

長い時間閉じ込められて、その間何度もお姉さま達と仲良く暮らしてる夢を見た。
こんな風になれたら……

そんなことを何度も考えた。

どうして私は、こんなことをしてるんだろう？

能力が危険だから？

気が触れているから？

分かんない、分かんないよ。

また一緒に楽しく暮らしたいよ。

「どうした？まさか、

もう終わるか？」

「うう……。。。」

助けて……………お姉さま……………

「フラーーーーン!!! 頑張れえええええええ!!!」

「!?……………お…姉…さま?」

「貴女はこんなことでへこたれる子じゃないでしょ?

私の知ってるフランドール・スカーレットは、

弾幕ごっこが大好きで、

楽しむことが大好きで、

少しかだけ聞き分けがなくて、

いっつも明るい笑顔を絶やささない、素敵な子よ!」

「!」

「頑張ってフラン! 私は、貴女を信じるから!」ニコッ

ずるいよ……

「う……。」ポロ

そんなこと言われたら、

「うう……。」ポロポロ

涙、止まんないよ。

「うううう……（グスツ）」ポロポロ

S a n s 視 点

レミリアがフランに呼び掛ける。
その姿が一瞬だけ、

俺の兄弟と重なったような気がした。

フランは泣いている。
これは、良くないな。

「おいおい……フラン。お前さんの大好きな姉貴が応援してるんだぜ？

泣いてたら、勝てないだろ？」ニヤニヤ

「!..... フンツ泣いてなんかないもん!

ちよつと目にゴミが入っただけだもん!」

「おつ、だったたら「オイラ」にも勝てるな？」ニヤニヤ

「当たり前だよ!! さっさと続きやろ!!」

フランはもう泣いてはいなかった。
泣いてるよりは笑ってる方が良い。

辛気くさい顔をしてる奴がいたら、
笑ってもらいたいのがコメディアンなのさ。

「さあ、決めようぜ？どっちが強いか。」

「よーし！これでラストだー！ー！！」

「頑張れええ！」

Q. E. D 「495年の波紋」

「Gaster Brastar」

フランは今までで一番の量の弾幕をばらまく。
オイラも今までで一番の火力でBrastarを放つ。

「はあああああああああ
!!!!」

ドツカー————ン
!!!!!!!

結果は……………。

「うつ…………… 負けちゃった。」

「h e h…………… 「今回は」オイラの勝ちだな？」

「うん。でも、次は絶対負けないもん!!」

「いつでも、かかってきな？」

さてと、ここからは……………

「フラン!!」

「お姉さま!」

姉の仕事だな？

「お姉さま、ごめん負けちゃった。」

「良いのよ。1人では出来ないこともきつと2人なら出来るわ。負けたのなら何度でも挑戦すれば良い。」

「うん……。ごめん。」

「だから「その事じゃなくて!」

「私がしっかり能力を扱えないせいで、お姉さまや皆に迷惑かけて……………」

「ごめんなs (ギユッ) !?」

レミリアは優しくフランにハグをした。

「……………謝るのは私の方よ。」

姉なのに妹が怖くてちやんと貴女を見てあげられなかった。

貴女の苦しみに気付いてあげられなかった。

本当にごめんねフラン……………。」ギユツ

「うう……………おねえさまあ……………（ギユツ）」ポロポロ

「まったく、泣き虫ね。」ナデナデ

「うう……………うう……………。」ポロポロ

いい話だぜ。

「……………これがあの姉妹のあるべき姿だな。」

ドタバタ

「ん？」

「Sans (さん) !!」

「おー。霊夢に魔理沙か、どうした？」

「どうした？じやないわよ！大丈夫だったの!？」

「ああ。元氣だぜ？」

「お前結局ここに残って何してたんだよ！」

「ん。」アゴシヤクル

「あ？そっちになんかあんのk……………成る程、お前って随分とお人好しだな？」

「そういうことだったのね……………」

「heh……………heh……………我ながら、良い仕事したと思うぜ？」

そこには、泣きつかれてスヤスヤと寝息を立てる姉妹の姿があった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

日常編

1 9 人里エンカウント

「……………
むにやむにや……………」ZZZZ
「……………
くう……………」ZZZZ

「れーいーむー!!!暇だから遊びに来たぜ!!」

「(パチツ) ふわゝあ……………
むゝ? ああ、魔理沙か。」

「おつ! Sans! 暇なんだ、遊ぼうぜ!」

「静かに頼む。まだ霊夢寝てるんだ。」

「へっ?」チラツ

「すう……すう……。」

「な？」

「オーケー、了解だ。とにかく遊ぼうぜ！」

「はいよ。何して遊ぶんだ？」

「どっか行こうぜ。」

「ふむ……朝ごはん食べてからでも良いか？」

「Sansが作るのか？」

「ああ……そうだ。」

「なら、私も食べさせる！」

「良いけど、大したもんは作れねえぞ？」

「大丈夫だぜ。さっ、早く頼むよ。」

「やれやれ、二人分か……こりゃあ〔骨〕が折れそうだ。スケルトンだけにな。」ツクテーン

「……………」

「おっと、お前さんはジョークは嫌いだったか？」

「??」

「違った。ジョークが分かってなかった。」

「ほい。お待ちどうさん。」

「待ってました!…………… ホットドッグかよ……………」

「h e h : : オイラに別の料理を期待した時点で、お前さんの負けだぜ。」

「まあ…………… 旨いから良いけども。」ガブッ

「ありがとうございます。」ガブッ

少女& a m p ; 骨 朝食中

「ふう……ごちそうさま。」

「あい。お粗末様。」

「よし！じゃあ出掛けようぜ！」

「ちよつと待つてな。」カキカキ

「何書いてんだ？」

「書き置き。」カキカキ

「律儀だな。」

「よし、書けた。で？どこに行くんだ？」ソトニデル

「取り敢えず、私の箒でどっかブラブラして決めようぜ？」ソトニデル

「ほら、後ろ乗れよ。」

「OK。」マタガル

「……………」

「ん？どうした？」

「……………」今回は抱き締めないんだな。」

「え？だって前回嫌そうにしてたじゃねえか。」

「……………」

「魔理沙？」

「うるせえ！さっさと行くぞ！／／」ビューン

「うおっ、もうちよつとゆっくり頼むぜ。」

「……………うん。Sansさん？」

シーン……………

「居ない。」

「あら？何かしらこの手紙。」

霊夢へ

これから魔理沙と少し出掛けてくる。

そんなには遅くはならないとおもう。

机の上にホットドッグおいておいたから起きたら食べな。

S a n s

「…………… ホットドッグか…………… 朝ごはんにしては、少し重いわね。」モグモグ
「あれ？この手紙続きがある。」

P, S

寝間着は、ちゃんと着ろ。

「寝間着？」チラッ

寝間着がはだけ、サラシが少し見えていた。

「……………」

S 「さて、取り敢えず人里に降りたわけだが……………」
魔 「特にすること無いんだよな。」

「どうするんだ？」

「うーん、悩むぜ。」

そうして決めあぐねていると

「あれ？魔理沙かい？」

後ろから「男」の声が聞こえてきた。

「ん？おお！「こーりん」！」

見てみると、眼鏡をかけた優しそうな男がいた。

「やあ、久しぶりだね。」

「アンタは？」

「僕は、森近 霖之助。君は？」

「オイラは S a n s 。ただのしがなないコメデイアンさ。」

「宜しくね、S a n s 君。」

「ああ。」

なかなかに良い奴そうだ。

「なあ、こーりん！私ら、今暇してるんだ！なんか面白いことないか？」

「え？うくん、そう言われても……。」

「頼むぜ！」

「…………… じゃあ、僕の店に来るかい？お茶位なら出すよ。」

「おう、ありがてえ！」

「店？霖之助は、店を開いてるのか？」

「ああ！「香霖堂」つていうガラクタ屋だぜ！」

「ガラクタ屋は、余計だよ。」

「ふむ………… ガラクタか… 少し見てみたいな。」

「S a n s 君まで…………… もう良いや、ガラクタで…………。」トホホ

そう言つてオイラたちは、「香霖堂」を直指して、歩くことにした。

t o b e c o n t i n u e d

#20 ガラクタ あります。

Sans視点

「へえ、つまりSans君は「スケルトン」という珍しい種族なんだね。」

「まあ、そういうことだな。」

オイラ達は人里を出て、「香霖堂」に向かって歩いていくところだ。

霖之助と話しているうちに、いつの間にかオイラの昔話になった。

「それに、Sansはスゲー強いんだぜ！」

私相手に弾幕ごっこで一回もスペルを使わずに引き分けまでいったんだ！」

「え!? それは、凄いな。」

「h e h 避けるのが得意なんだよ。」

「あとは、あの「ガスタープラスター」って奴も凄いカッコいいんだ！」

「「ガスタープラスター」なんだい?それは。」

「コイツの事だ。」パチン

オイラは指を鳴らして B r a s t a r を出す。

「うわっ! ……これは… 少し怖いな。」

「そうか? 私はカッコいいと思うんだが…。」

「少し、触ってみても良いかな?」ソロリソロリ

霖之助が B r a s t a r にゆっくり手を伸ばし、触ろうとすると… 青白い光が灯つていく。

「!! コーりん! 伏せろ!!」

「へ? …… (キューン) わわっ!? (ズギューーン!!!)」

霖之助が伏せた直後に B r a s t a r が放たれる。

後ろの木に穴があいて、もげた。

「おっと、気を付けな。 B r a s t a r はちよつとばかし気性が荒いぜ?」

「ほへへ…。」

霖之助が軽く放心している。

すると、後ろから鉄拳がとんでくる。

M I S S

「馬鹿 S a n s !! こーりんに当たったらどうするつもりだ!」

「…………… コイツを使い始めて、もう結構長いんだぜ? 流石にそんなヘマはしないや。」

「それでもだ!!」 プンスコ

あー、これはコツチが謝るまで終わんない奴だな。

こーりいうのはさっさと謝って終わらせるに限る。

「…………… まあ、そうだな。」

ジョークにしちやあ度が過ぎてたかもしれない。悪かったな。」

「大丈夫だよ。僕も良いものが見れたしね。」

それはそうと、着いたよ。」

見てみると、「香霖堂」と書いてある看板が掛けられたボロ家がある。

「これか?」

「うん。これが僕の店だよ。」

扉を開けると、カランコロンと音になった。

「よし、こーりん! お茶!」

「はあ…………… 分かったよ。少し待っててくれ。」

そう言うとき霖之助は、店の奥に消えていった。

「これが全部…… ガラクタか……。」

「おう！使えるものから、そうじゃないものまで！何でも有るぜ？」

「…………… 霖之助が戻るまで少し見てるか。」

いろんな物があるな。

自転車に…… 携帯に…… テレビ…… 変な人形みたいな奴。

大量のガラクタの中で一つ、見覚えがあるものがあつた。

「おー、コイツは良いな。」

オイラはそれを手に取つた。

「ん？なんだそれ？」

魔理沙が除き込んできた。

「コイツか？コイツはな、「トロンボーン」ってんだ。」

「とろんぼーん？何に使うんだ？」

「見てな。」

フア☒？フア☒？フアーン☒？

「おお！スゲエ！それ、楽器だったのか！」

「スゲエだろ？オイラ、たまにコレ吹いてたんだ。」

主に相手を茶化すときにな。

「欲しい物でもあつたかい？」

霖之助がお盆の上にお茶とお菓子を持って出てきた。

「ああ。霖之助、コイツはいくらだ？」

トロンボーンを見せながら言う。

「ふむ、4000円つてところかな？」

「よし、買った。」

「毎度あり。」

「良いのか？あんまり高い物買うと、霊夢がキレルぜ？」

「heh:.. 巫女が怖くて買ひ物が出来るかってんだ。」

「ハハハ、違くない。」

お茶を飲みながら、結構長い時間談笑していた。

そうして一時間がたった頃……………

「こーりん！おかわり！」

「またかい？はあ…… いったい何杯飲めば気が済むんだ。」

「まだ、五杯しか飲んでないぜ！」

話だけ聞くと魔理沙が酒豪みたいだが、違う。

ただお茶をがぶ飲みして、お菓子を貪ってるだけだ。

「あまり食べ過ぎないでくれよ？夜には「宴会」もあるんだから。」

「宴会？なんだそいつは。」

「ん？Sans、霊夢から話聞いてないのか？」

「聞いてない。聞いてたとしても覚えてない。」

「幻想郷では異変が終わる度に宴会を開いて、皆で飲み食いして騒ぐんだぜ！」

「今回の宴会は、おそらくSans君の歓迎会でもあるんじゃないかな？」

「へえ……。」

宴会ねえ……

「まつ、とっておきのジョークでも暖めとくか。」

「ハハハ、まあ期待しておくよ。」

このあと少し喋って、霖之助にお礼をして店を出たあと、魔理沙に神社まで送って

もらった。

神社に戻ってくるなり、顔を真っ赤にした霊夢に怒鳴られた。
意味が分からん。

t o b e c o n t i n u e d

2 1 宴会準備と腹ペコ妖怪

Sans視点

「Sansさん！サボってないで手伝ってよ！」

「霊夢。オイラは、サボってるんじゃない。少し仕事を置いといて寝てるだけ。」
「それをサボってるって言うの！」

時刻は午後3時

今は霊夢と宴会の準備をしているところだ。

霊夢の話だとアホみたいな数の「妖怪」が来るらしい。そこで酒を飲んだり、騒いだりして遊ぶようだ。

「まったく……なんでウチで宴会なんて……」ブツブツ
霊夢は神社で宴会が開かれることにご立腹のようだ。

「Sansさん。そこ、箒で掃いといて。」

「OK。」

「そっちじゃないわ。そこよ。」

「OK。」

「行き過ぎよ！少し手前！」

「OK。」

「5cm（目録）しか動いてないじゃない！もっとコッチ！」

「OK。」

「そこ！そこでストップ！」

「OK。」

オイラは箒で掃き始める。

「はあく………疲れる。」

「まったくだぜ。」

「誰のせいだと思ってるのよ！」

「少なくとも、オイラのせいじゃねえな。」

「……………もういいわ。頭痛くなる。」

「おー、しつかり休めよ。」

「……………。」

さてと、掃除やつちやうか。

数十分後

「ふうく、やっと終わったあ。」

「お疲れ様。」

「おう、ありがとさん。」

「宴会まで、まだ大分時間があるわね。」

今は3時40分……宴会開始はおよそ5時。

「……………そうだな……少し店の様子見てくるぜ。」

「今から人里まで行くの？大丈夫？」

「大丈夫だ。近道を知ってるからな。」

「近道？」

「ああ、とっておきの「近道」さ。」トコトコ

く人里く

さて、「近道」で来たからすぐに着いたな。

「店は大丈夫かな？」

オイラはそう言っただけで歩く。

よし、着いた。

「お？」

店に入るために鍵を開けようとしたら、扉が開いてるのに気づいた。「泥棒か？盗めるものなんて、パンとソーセイジぐらいだが……。」

オナカ スイタノダー

「……………」
扉の奥から聞き覚えのある声がある。

ガチャ

「お腹空いたよ〜。」

扉を開けて中に入ると、金髪の少女が倒れていた。

「ルーミア、何してるんだ？」

「うう〜?………… あっ!Sans!」

ルーミアはオイラを見つけると嬉しそうな顔をした。

「Sans〜。お腹すいた〜。」

「……………分かった。今作るから少し待つてな。」

五分後

「はいよ。お待ちどうさん。」

「ワーイ!!頂きま〜〜す!!!」ガブリ

ルーミアは笑顔でホットドッグにかぶりつく。

「ん〜♥? うまうま♥?」モグモグ

「どうやって入ったんだ? 鍵もしてあったのに。」

「壊した!」ドヤア

「oh……………」

「ふい〜。ごちそうさま!」

「ん。」

また、5回もおかわりしやがった。コイツの胃袋どうなってるんだ。

今の時間は……… 4時30分か……。

ルーミアと駄弁つてから行けばちようど良いか？

「ねえねえ、Sans。」

「ん？どうした？」

「この店つてさ、他のメニューとか無いの？」

「無いな。オイラそんなに料理出来ないし。」

「ホットドッグ……美味しいけどさ、それ一本でいくの大変じゃない？」

「……… そうだな。少しキツいな。」

「でしょ？」

「だけでも作れる料理なんて………！」

「いや、あった。作れる料理。」

「おう!! 何作れるの？」

「h e h …… そいつは内緒だな。」

「えー。教えてよ。」

「…… じゃあ次店に来たとき、そいつを食わせてやるよ。」

「分かった！約束だよ！」

「はいよ。」

それからルーミアと軽い世間話をして時計を見ると、時刻は4時40分。今から行けばちょうど良いな。

「なあ、ルーミア。お前さん、今日の宴会来るのか？」

「宴会？行きたい!!」

「OK。なら、付いてきな。近道を知ってんだ。」

10分後

く博麗神社く

「ほら、もう着いた。な？早かったろ？」

「ほえええ。本当にすぐに着いたね。」

「おかえり、Sansさん。」

「ああ、ただいま霊夢。」

「霊夢。久しぶりなのだ。」

「あら、ルーミアじゃない。アンタも宴会に来たの？」

「そうなのだ。」

「回りを見渡すと、もうすでにガヤガヤ言つて、ちよこちよこ酒を飲んでる奴もいる。知った顔もちらほら見える。」

「もう始まつてるのか？宴会。」

「ええ、始まつてるわ。」

「どうやら始まつていたらしい。この様子だと、始まつてから少し時間がたつてゐるみたいだ。」

「Sansさんも、行つてきたら？」

「まあ、せつかくの宴会だからな？」

「そんじゃ、楽しもうかね。」

そうやってオイラは、騒がしい方へ歩き出した。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#22 酒は飲んでも飲まれるな

S a n s 視点

ワイワイガヤガヤ

「もう大分騒いでんな。」

皆それぞれ、酒を飲んだり、飯を食ったり、歌ったりしている。たまにコツチを不思議なものでも見たような目で見ると、別にスケルトンの一人や二人珍しいものでもないだろうに。

ちなみにルーミアは「ししよー」達を見つけて、一緒に飲みに行った。見た目は小さくても大人なんだな。

「おーい！Sans!!コツチと一緒に飲もうぜ〜！」

「コツチよー！」

ウロついていると、やかましく叫ぶ親友の声が聞こえてきた。どうやらアリスも一緒のようだ。

「へいへい。」

「おつ、魔理沙もやつと学習したか。」

「くつそー！ー！！イライラするぜ！！」

「もう良いから、早く飲みましようよ。」

「だな。」

「はあ………よし、Sans！飲むぞ！器寄越せ！」

なんつー切り替え速度だ。

「ほらよ。」ウツワサシダス

「まったく、Sansは幸せもんだな〜！こんな美少女にお酌して貰えるんだからな。」

「本当だな。魔理沙みたいなべっぴんさんにお酌して貰えるなんて。お釣が出るレベルだ。」

「褒めたって、酒しか出ないぜ。／／／

なんだコイツ。自分から話振ったくせに。

「Sans。乾杯しましよ。」

「はいよ。」

オイラとアリスの器がカチンと音を立ててぶつかった。

「シャンハイ。」カチン

ついでにもう一つ小さな器がぶつかった。

「お？お前さんも飲むか？」

「シャンハイ!!」

「その娘は上海。私の作った人形よ。」

「へえ。お前さん人形だったのか。」ナデナデ

「しゃくんはくい♥?」

撫でてやると、気持ち良さそうな顔をした。

「シャンハイ。」ピヨン

「お?」

上海が飛び上がったと思ったら、オイラの頭の上に着地した。

「しゃあんはあい。」グデー

頭の上でリラックスし始めた。

「フフフ…… どうやら上海になつたかたようね。」

「あー、若干頭が重いんだが。」

頭の上からスウスウと寝息のような音が聞こえてきた。人形って寝るのか？

「(ゴクゴク)……ふう、旨い！やつぱりこれだぜ！」

やけに静かだと思ったら、酒飲んでやがった。

もう一本目を空けそうな勢いだ。

「魔理沙に全部飲まれる前に、私も飲まなきゃ。（ゴクゴク）」

「じゃあ、オイラも。（ゴクゴク）」

随分とキツイ酒だな。

「少しキツくないか？これ。」

「私も同じことを思ったわ。」

「なに言ってるんだ！こんなの飲んだうちにも入らないぜ！（ゴクゴク）」

「大丈夫か？」

「ああ！まだまだ飲むぜ〜〜!!!」

10分後

「どうしてこうなった？」

魔理沙が酔っぱらうのは予想出来たが、まさかアリスも酔うなんて……。

「(パチツ)… しゃんはあい？」アクビ

「おっと、起きちまったか。悪い悪い。」ナデナデ

「シャンハイ。」ユビサス

まるで「あっちに行こう」とでも言うように、指を指し始めた。

魔理沙 「俺は人間を辞めるぞオオオオオオオオ!!!／／／」

アリス 「魔あああ理沙ああ!!!君が！泣くまで！殴るのを止めない!!!／／／」
魔理沙 「H A H A H A!!貧弱、貧弱ウ!!／／／」

「おう。そうだな。ここは、うるさいからアッチ行こうぜ。」
というわけで、オイラはCOOLに去るぜ……

t o b e c o n t i n u e d

2 3 小さな友人 無邪気な妹

S a n s 視点

「さて、どこに行こうか。」

「シャンハイ?」

「上海、どっか行きたい所あるか?」

「シャンハイ!!」ビシイ

頭の上で上海が指を指す。

指を指した方向には、見知った吸血鬼達の姿が見える。

「OK、アツチに行くか。」トコトコ

レミリアの傍まで歩き、声をかける。

「面白そうな話してるな。オイラも混ぜてくれよ。」

「あら、Sans。魔法使い達はもう良いの？」

「アレを見てくれ。」ユビサス

「ん？」

「WRYYYYYYYYY!!!
///
」

「うるさいからコイツと一緒に逃げてきた。」

「シャンハイ。」

「成る程ね。理解したわ。」

レミリアも苦笑している。

オイラもここで1つジョークでもキメてやろうと考えていると、突然……………

「お兄様~~~~~!!!!!!
グフウ。」

HP 12 / 1

横からミサイルが飛んできた。

危なかった。

宿屋（神社）で体力の最大値を増やしていなければ即死だった。

「フラン……次からはゆつくり頼むな？でないとオイラ、死んじやうから。」

「えへへ。ごめんなさい、お兄様♥？」ギュー

フランはニコニコしながらオイラに抱きついている。

「しゃ……しゃんはーい？」

上から不安そうな声が聞こえてくる。

「大丈夫だ。生きてるぜ上海。」ナデナデ

「しゃあん……。」ウツトリ

「あつ！ずるい！お兄様、私も!!」

「ハイハイ。」ナデナデ

「みゅゅゅ♥? (≧▽≧)」

「ところで、さつきから気になってたんだが……。「お兄様」ってのは、ひよつとしてオイラの事か?」

「うん!!」

参ったな。

オイラはどちらかと言うと「お兄様」っていうより、「兄ちゃん」の方があつてるんだが……

「異変が終わってからずっとこの調子なのよ。」

この前なんて、どこから持ってきたのかパーカーを着て左目に青いカラーコンタクト入れて、「さつきとやろうぜ。」ってポーズ決めながら言ってたわ。」

「あの時は大変でした。妹様の「S a n s ごっこ」なるものに付き合わされて……。」

「なんだそりゃ。オイラの真似か?そして咲夜、いたのか。」

「いました。最初から。」

「んふふ。あの時のお兄様がとつてもカッコよかったから、フランもお兄様みたいになりたくて真似してたの!!」

「へえ。オイラの真似をするなら、ジョークの1つでも言えるようにならないとな?」

「言えるよ！」

ほう。なら、聞かせてもらおうじゃないか。

「言ってみそ。」

「分かった！お姉様、聞いててね！」

「え!?!私!?!」

唐突な指名に狼狽えるレミリア。

「いくよー！スケルトンの家はどんな家でしょう？」

「ス・・・スケルトン？……………うーん……………分からないわ。木造の一軒家かしら？」

「ハズレ!!答えは…………………………」

少しの間の後……………

「屋根が「スケスケ」なんだよ！」ツクテーン

ブフオ！

宴会に参加していた何人が吹き出した。

「プフツｗｗ」プルプル

レミリアもかなり笑っている。

「どう!?!お兄様!!」

「ビビったね。笑いのセンスが光るぜ。」

「へへ。」

「いやー、本当に……………」

心に「ボーン」と響くナイスジョークだったぜ。骨だけにな。」ツクテーン

ブハッ
!!!!

また、何人が吹き出したようだ。

「プハッｗｗｗｗ」プルプル

「キャハハハハ!!」

レミリアはどうかして笑いをこらえようとしている。

フランは腹を抱えて笑っている。

咲夜はそっぽを向いているが、肩がプルプル震えている。

そんで後ろの方でゲラゲラ笑っている魔法使い二人の声がある。

「これがジョークだぜ、フラン。」

「アハハwwヒーww面白かった。流石お兄様!!そこに痺れる憧れるウウウウウ!!」

楽しく騒がしい宴会は、まだまだ続きそうだ。

t o b e c o n t i n u e d

#24 消え行く本音

S a n s 視点

「でね、その時にお姉様がおもいつきり転んで頭を机の角にぶつけたの!!」

「ちよつとフラン!! それは言わないって約束でしょ! / / /」

「オイオイ：： カリスマの力の字も無いな。いったいどこのおぜうの話だ?」

「う：： うー☆ / / /」

「それでね!——」

今は吸血鬼姉妹と一緒に飲みながら、レミアアの恥ずかしい話暴露大会をしていたところだ。

こんなこと前にもあったような気がするな…

ヘックシユン!!!!
ダイチャン?

1つ気になって、レミリアに他のメンバーはどうしてるのかを聞いたところ、美鈴は門番の仕事、パチュリーは引きこもって読書だそうだ。

美鈴はともかく、もやしは完全にニートだな。

それをレミリアに伝えると、笑いながら「そうかもね」と言われた。
コイツは友達が好きなのか、嫌いなのか良くわからんな。

え? 咲夜はどうしたって?

.....
アツチを見てくれ。

魔 「スタープラチナ!!! / /」

咲 「ザ・ワールドオオオオオ!!! / /」

アリ 「オラオラオラオラオラオラア!!! / /」

靈夢 「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア!!!／／／」

観客 「ワアアアアアアアアアアア!!!」

咲夜がアツチに参戦してしまった上に、靈夢も参加して、いつの間にか観客までいる始末だ。

おい……、その

「このネタまだ続けんのかよ……」

とか一瞬でも思ったやつ……
察してやってくれ。

「お兄様！聞いているの？」

「ああ、聞いている聞いている。レミリアが阿波おどりをしたって話だろ？」

「違うよ！もう！ちゃんと聞いててよ！」

「どうして私が阿波おどりなのよ！」

なんだかんだオイラも結構疲れているのだ。

朝っぱらから魔理沙に連れ回されて、

帰ってきたら宴会の準備をして、

ルーミアにホットドッグ作ってやって、

終いには酔っ払いの相手と妹の長話と姉の癩癩。

濃すぎる1日だ。

「(ふわくあ)……………」ウトウト

「お兄様、もしかして眠いの？」

「ああ、今日は色々あったからな。疲れてんだ。」ウトウト

「ふうくん……………」
ねえ、寝るならフランも一緒に

寝ていい？」

「え!? フラン! 宴会はどうするの?」

「そんなの別に良いじゃん! 食べたいときに食べて、寝たいときに寝るのがお兄様なんだよ! ね? お兄様!」

「グウ……グウ……。」 Z Z Z

レミリア視点

「ありやりや、もう寝てるよ。」

「……寝るのだけは速いのね。」

……彼は、謂わば私達の恩人だ。

私とフランとの数百年ぶんの深い溝をいとも容易く埋めてしまった。

私がフランと元通りになれたのは、彼が私の背中を押してくれたから。

彼が私を

「手伝って」くれたから。

あの細い骨の腕で、

あのニヤけた表情で、

あの青い瞳で、

……しかし、何故だろう。

これだけ恩を受けておきながら……

あれだけ仲睦まじくしておきながら……

私はまだ、彼に恐怖に似た感情を持っている。

コレがどこから来る感情なのか、私には分からない。

そんなことを考えていると……

「……………見て、お姉様。」

フランがSansを指差す。

「うん？何？」

私はそれを覗きこむ。

そこには座った姿勢のまま、気持ち良さそうな顔をしながらグツスリと眠っているSansの顔がある。

「……………Sansがどうかしたの？」

「はい、見て。」

フランは目元を指差していた。

Sansの目元は少しだけ、濡れていた。

目から零れた水は 頬を伝い、落ちた。

「……………泣いてる？」

「うん。」

口はニヤニヤと笑っているのに、涙は絶えずポロポロと頬を滑り落ちていく。

「うーん……………」

「!!」

彼が少し動いた。

「…………… P a p p y…………… r u s……………い……………かな……………いで……………くれ……………」ポロポ

□

「……………」

「……………こんなこと聞いたら、変かもしれないけど……………」

「うん。」

「S a n s っ て……………家族は、いないのかな。」

「……………」

（その結果、弟は殺され、オイラはソイツに復讐した。）

「……………分らないわ。」

「私には、狂気や能力に飲まれても助けてくれる家族がいた。でも、Sansには？」

きつと……………もう、彼には家族は残っていないのだろう。

私に出来ることはないか？

話を聞いてあげる？慰める？

そんなものはどれも違う。

何も無い。「私」が彼にしてあげられる事なんて……………

.....

なら.....「私達」だったら？

（オイラがお前さんを信じてやる。）

（信じてもらえるまでやってみろ！）

「.....フラン。」

「ん？」

「…… どうして、今の私達がいると思う？」

「え？ どういう事？」

「いいから、答えて。」

「…… ウーン、しっかりお話し合いしたから？」

「いいえ。答えは、信じあっていたからよ。クサイ言葉だけだね。」

「うん？」

「私がフランを信じていたから、

フランが私を信じてくれたから、

そして……

S a n s が「私達」を信じてくれたから。」

「!!」

「彼は見ず知らずの私達を信じてくれたのよ？　なら、やることは1つじゃない？」

「彼が私達にしてくれたように、私達も彼にしてくれるの。」

私達が彼の家族になってあげるの。

S a n s を信じてあげるの。

それが、それこそが……！

私達の「決意」よ！」

「…………… うん、そうだね！ 私が………… 私達がやるんだ！」

「…………… 少し熱く語ってしまったわ。」

「本当にね！ 普段なら絶対有り得ないのに。」

「うー☆／＼／」

「…………… でも、コレでやっと思返しが出来るね！」

「… そうね。彼は要らないって言いそうだけでも。」

「アハハ！ 言いそう！」

「よーし！ そうと決まれば作戦そのー！ 一緒に寝る！」

「え!? いきなり!」

「家族なんだから、一緒に寝るのは当然でしょ! ほら速く!!」

「うゝつ…… わ…… 分かったわよおゝ／／／」

「お姉様はそっち側ね! 私はこっち!」

「…… ハイハイ。」

「おゝう! 良い匂い。それじゃあ、おやすみ。」 ZZZ

「速っ!? もう寝たの!」

「…………… グウ。」 ZZZ

「うゝゝ! まったく人の気も知らないで……」 ブツブツ

かく言う私も、もうすでに眠気がピークなのだ。まぶたが重くて仕方がない。

「…………… S a n s。私達が貴方の家族になるから。」

だから、もう無理な笑顔はよして。

本当のSansとしての笑顔を見せて。

今すぐじゃなくて良いか……ら、いつか……必……ず。」ZZZZ

「ありがとよ。レミリア。」

眠りにつく瞬間、宴会の喧騒に紛れて優しい声が聞こえた気がした。

#25 看病は骨にお任せあれ

霊夢視点

「…… おええ…… 飲みすぎた…… 気持ち悪い。」ヨロヨロ

魔理沙め…… ふざけて何杯も飲ませたあげく、良く分からない戦いごっこにまで参加させおつて……

「今度…… しばく……。」ヨロヨロ

ああ、駄目だ。頭がクラクラして、視界が定まらない。

「うう…… おえ……。」フラフラ

まずい。このままだと倒れる。

「…… どうした？フラフラして。新しいダンスか？」

おちやらけた声でした。

「…… ん？…… Sa…… ns…… さん？」

「ああ。Sansさんだぜ。」

「……ごめん、Sansさん。ちょっと肩……貸して。」

「オイオイ、何言ってるんだ。肩は貸し借り出来ないぞ?」

「こんなときまで冗談を言う姿勢は、一周回って感服するまでである。」

「冗談は……いいから……本当にヤバイ。」

「heh… heh… はいよ。」

「あり…がとう。」

「ほれ、霊夢。布団だ。」

「うう……。」
「ゴロン」

Sansさんが敷いてくれた布団に寝転がる。

「いったい何杯飲んだらそんなになるんだ？」

「……分かんないけど……私は瓶2本分ぐらいかな……。魔理沙はもつと飲んでる。」

「そうか。」

「……… Sansさんは何してたの？」

「オイラか？ オイラは…… さつきまで吸血鬼姉妹と飲んでたぜ。」

「え？ 大丈夫だったの？」

「ああ。仲良くレミリアを茶化しながら飲んだ。それどころか軽いお悩み相談もしてきた。」

「お悩み相談？」

「おう。随分と親身になって聞いてくれたぜ？」

「へえ。あの吸血鬼も案外良いところがあるのね。」

「ああ。」

「……………」
「本当に良い姉貴だ。」ボソツ

彼が何かを呟いたような気がした。

「S a n s さん、今何か言った？」

「別に。ただの独り言さ。」

「そう……………」

「なんかいるか？」

「へ？」

唐突で驚いたばかりに、声が少し上ずった。

「気持ち悪いんだろ？ だつたらオイラが看病してやるよ。」

「い物とか無いか？」

なんか持つてきて欲し

「…………… え…………… えーと…………… じゃあ、何か飲む物を持ってきてくれる?」

正直、魔理沙と同じ位 面倒くさがりの S a n s さんが自分から看病を名乗り出たのがとても意外だった。

「飲む物? ケチャップで良いか?」

「ケチャップを飲み物と認識しているのは、世界中で貴方だけよ。」

「h e h …… 冗談だ。台所から水でも持つてくるよ。」

「ええ。ありがとう。」

「気にすんな。」

そう言つて彼は、台所に向きを変えた。

しかし、そこで私は 彼の上着のフードがなにやらモゾモゾと動いているのを見た。

「…………… S a n s さん。フードに猫でもいるの? 動いてるけど……………」

「ん?…………… ああ、起きたのか。上海。」

S a n s さんが声をかけると、フードの中から小さな女の子がひよこつと顔を出した。

「しゃんはーい!」

「はいはい、おはようさん。起きたんだったら、フードから出てくれ。」

「しゃん!!」ブンブン

上海は首を横に振った。

「はあ……困ったもんだぜ。」テクテク

彼は諦めて上海をフードに入れたまま、台所に向かった。

「ほらよ。水だ。」

「しゃんはーい。」

「ん……ありがとう。」

コップを受けとり、酒の飲み過ぎで熱くなった喉に冷たい水を流し込む。体から

残った酒気が抜けていくのが分かる。

「(ゴクゴク)……ふう、ありがとう。大分楽になったわ。」

「オイオイ……これでも一応同居人なんだぞ？礼は言うもんじゃないぜ？」

「いや…… それとこれとは話が別でしょう……。」

彼と暮らしはじめて、少し分かったことがある。

彼、Sansさんはどうやら お礼を言われたり、褒められたりするのがあまり得意では無いらしい。

変なの。

本当に変な人。

「おう。良く言われる。」

「あれ？声に出てた？」

「いや、表情でなんとなく分かった。」

怖！ なにそれ！

「まあ…… 友情の成せる技だな。」

「……… 凄い。さとり妖怪みたいね。」

「さとり妖怪？」

「心を読む妖怪のことよ。確か、地底に住んでるとか聞いたわ。」

うろ覚えで曖昧だが、地底の地霊殿だか、愛骨伝だかに住んでたはず。

「へえ〜。面白い事聞いたな。今度、一緒に行ってみるか上海。」

「しゅんはーい！」

上海は元気に返事をした。

いつの間にか、上海がずっと一緒であることが前提になっているのに疑問を覚えた
が、気にしないことにした。

煩わしい宴会はそろそろ終わりを迎える。

t o b e c o n t i n u e d

#26 お酒は危険

S a n s 視点

ガヤガヤ

時刻は午後11時。

宴会開始から、およそ六時間ほどたった。

それなりに夜遅いからか、ちよこちよこ帰り始めてる奴もいる。

ちなみに、ついさっきレミア達も帰ったぞ。

帰り際にフランの頭を撫でてやったら、嬉しそうな顔をしてたな。

レミリアには耳元でコソツと「姉貴」と呼んでみた。

そしたら、顔を真っ赤にして唸ってた。

でもその時にどこか満たされたような顔をしたのは気のせいじゃ無い筈だ。

咲夜はベロンベロンに酔っていたが、レミリアが一発ひっぱたいたら直った。

そんでオイラにお礼をして

「いつでも紅魔館にいらしてください。とっておきの紅茶をお出しします。」

と、言った。

「まあ、行けたら行くよ。」

って言った。これは、オイラが面倒なときに言う常套文句なんだ。

咲夜はクスツと笑って「お待ちしていますね？」なんて言い残して、レミリア達と帰っていった。

そんなわけでレミリア達もいないし、霊夢も寝ちまったからとても暇なんだ。
暇すぎて、上海とアルプス一万尺やってるぐらいだ。

く外く

さて、歌声をたどって外に出てみれば……………

魔 「テレレく♪テレレく♪テレレレレレレ♪／／」

ア 「(チーン)……………」

やかましい魔法使いと、ヤ○チャポーズで倒れてる魔法使いがいた。

「おい。死んだのか？」ツンツン

「大丈夫よ。生きてるわ。」

あつ、生きてた。

「イタタ…… うう…… 流石に調子に乗りすぎたわ。」

アリスが体を重そうにしながらゆっくりと立ち上がる。しかしまだ大分酔っているのか、フラフラしている。

「…………… その様子だと相当飲んだみたいだな。」

「…… ええ。倒れるまで飲むなんて初めてよ。はあ…… 魔理沙には困ったもんだわ…… うえつぶ……」

「heh…… まったくだな。」

オイラでもアイツの酒癖の悪さは一発で分かる。

「んで、当の本人は一人リサイタルやつてるわけだが……」

オイラは魔理沙を指差しながら言った。

「…………… 毎度の事ながら、いったいどこにあんな元気があるのかしら……………」

「しゅんはーい……………」

アリスとフードの中の上海が呆れたような声を出した。

「ん？今、上海の声が聞こえたのだけど？」

「ああ。ここにいてるぜ？」クルツ

オイラは半回転してアリスに背中を向けた。

「しゅんはーい!!」

「あら、そんなとこにいたの。アハハ、丁度よく納まっちゃって。」

「頭で寝てたと思つたら、いつの間にかオイラのフードに住んでたんだ。」

「へえ〜。」

「イヤーそんなときはビビつたぜ。フードを見たときオイラはこう思つたね。」

あつー！こんなところに人形が住ん「ドール」なんつってな。」ツクテーン

「プッ！……（プルプル）…… 貴方つて本当に抜け目無いわね。」

「おう。ありがとよ。」

「褒めてないわ。」プルプル

この後、数分の間オイラがジョークを連発してアリスの腹をおかしくしたのはまた別の話。

t o b e c o n t i n u e d

#27 空から降ってくるのは恵みの雨と金だけでいい

よう、お前さんら。オイラだ。Sansだ。

随分久しぶりだな。オイラのこと忘れてねえか？

唐突だが、あの宴会から3日がたった。

急すぎるとかそういうの無しな？

この3日間は特にコレとって目立った事は起こってないし、していない。
強いて言うなら 料理の練習してたぐらいだ。

いや、嘘ついた。1つだけあったな。

「家族」が増えた。

オイ。今 変な事考えた奴いるだろ。

先に言っておくと別に霊夢やその他とは何も無い。

ただ宴会の日から妙に上海になつかれてしまつて、それから一緒に暮らしてる。

宴会終了間際、アリスが上海を連れて帰ろうとすると物凄い勢いでオイラのフードに隠れたんだ。

そのままフードのふちをガツシリ掴んで、まるで『離さない』と言わんばかりに思いつき力をこめてたな。

多分、あのときの上海は梃子でも動かなかつたんじゃないか？

んで、結局アリスの方が折れて 一緒に暮らすことになったわけだ。
条件として 時々顔を見せにこいと言われたがな。

宴会が終わってから

掃除して、寝て、起きて、料理の練習して、寝て、の繰り返しだ。

おかげで作れる物が増えたぜ。

そんなもつて、今日からそいつを店に並べんのさ。

というわけで、オイラは今 店なうだ。

いつものごとく頬づえをついて客を待つ。

しかし大抵の奴は店の前を素通りしていく。時たま物珍しそうに眺めて来る奴はいても、買っていく奴はなかない。

「……… しゃんはらい？」

「大丈夫だぜ上海。だいたいいつもこんな感じさ。」

そうそう、言い忘れてた。今は上海も一緒だ。

オイラの仕事風景に興味があるのか、それともただ暇なのか。

「売れないのはいつもの事だから、知らない人に目線で圧かけんのは止めてくれ。」
「しゃん。」

オイラがそう言うのと、上海は渋々といった様子で睨むのを辞めて 今度はオイラの頭の上に乗ってくる。

しゃん…… という不貞腐れたような声を出しながらな。

「……………にしても……客が来ないと こうも仕事が無いとはなあ……………」

「しゃんはいい……………」

もう店の掃除も 料理の下準備も終わってしまったから、本当にやる事が無い。

「……………早く客の1人でも来ねえかなあ……………」

なんて独り言を喋っていたら それは突然現れた。

「あやややややく!!!」

間抜けな声を発しながら 何か物が凄惨な爆音と一緒に目の前に墜落してきた。それも結構大きい物が。

さらに言えば落ちてきた物…… いや、者は黒い羽根を背中に付けた女の子であつた。

この小説、「親方!! 空から女の子が!」パターン多くねえか?

「いたた……… くそう…… 大天狗様…… 許すまじ……。」

「おいおい「文」……… そんな所に落ちてくるなよ。営業妨害だぞ?」

「…… これでも調整した方なんですよお………」

この見た感じポンコツな鴉は「射命丸 文」紹介は前にやったから別に良いな。

「いやー！ようやく出て来れましたよ!! 最序盤で名前だけ出てきてからここまで長かったです!」

「おつと文……。それ以上はやめておけよ? …… 用がないならなんか食っていけ。用があつても食っていけ。」

「なんと横暴な!! 今回はしつかりと取材という立派な用事が有るんですから!!」

「取材? この前 受けたじゃねえか。他にオイラの何を喋れつてんだ?」

「いえ 今回はSansさんの取材ではなくてですね、ズバリ! 紅霧異変についてのお話をお聞かせ願えればと思つて文字通り 飛んで来た所存です!! それで! どんな異変でしたか!? そのこの所を詳しく教えてください!!」

「…………… やれやれだぜ…………… (ハア)」

「しゅんはあい…………… (ハア)」

オイラのため息と一緒に上海が呆れた様な声をあげた。
また、面倒くさい事になりそうだ。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

2 8 お客さん

「はい！ありがとうございます！以上で取材は終了になります。お疲れ様でした！」

「……………おう…………… お疲れさん」

あれから約3時間、ほとんど休憩もなくぶっ通しで取材を受けていた。

異変の事から始まり、紅魔館のメンバーの事、レミアやフランとの事、しまいには上海の事まで質問攻めにあつた。

見ろよ。あんなに元気だった上海の目から光が消えて体育座りしてるじゃねえか。

最後の方なんてオイラ脳みそ働かせずに答えてたから、何を聞かれたのかも分からん。

…………… まあ、スケルトンに脳みそは無いが。

「では、私は今回仕入れた情報で新聞を作ってきますのでこの辺で。完成したら見せに来るので、楽しみにしてくださいね!!」

「……おう。」

「それでは、失礼します!!」

そう言うと、目にも止まらぬ速さで文は飛び立っていった。

結局、何も買っていかなかったな。

もうほとんど日も傾いて、空はすっかり橙色に染まっている。客も来なさそうだし、今日は店を閉めるかなと思っっていると

「やあ、まだ開いているかな?」

「おつ、こりや珍しい客が来たもんだ。」

人里の守護者こと、上白沢慧音がやって来た。どことなく、浮かない顔をしているように見える。

「すまない、こんな時間に。そろそろ店を閉めるんじゃないのか?」

「どうせ客も来なくて暇だからな。少しくらい延長したってバチは当たんねえだろ。そんで?なんか食ってくか?材料は余ってるから作ってやれるぜ?」

「そうだな……。なら、話をしながら軽くつまめる物をくれ。当然、お金は払うぞ。」

「OK、少し待ってな。上海、手伝ってくれ。」

「しゅんは〜い!」

体育座りしていた上海を呼び、食材を切ってもらおう。その間にオイラは油の準備だ。察しの良い奴ならこの時点でオイラが何を作ろうとしているのか分かるだろう？

15分後

「出来たぜ。ほらよ。」

考え事をしていた慧音の目の前に皿を差し出す。

「これは？」

「コイツはポテトつつうもんだ。オイラがホットドッグの次に好きな食べ物だぜ。冷めないうちにどうぞ。」

皿の上には元々キレイな黄色だった芋が、油を纏うことで光沢が増している。見ようによつちや黄金色にも見える。

「で……。では。」

恐る恐るといった様子でゆっくりと指を伸ばしていく。山から一本取り、口元に運ぶ。警戒しているのか最初は匂いを嗅ぎ、よく観察してから意を決して口の中に入れた。

瞬間、慧音の目が見開かれた。

一本、もう一本とポテトを食べ進める手がどんどん早くなる。そしてその一本一本を頬張る度に、幸せそうな顔が垣間見える。

「お気に召したようで何よりだ。」

オイラがそう言うのと慧音の身体が強張る。顔を赤くして動かなくなつた。どうやら必死にポテトを食べ進めるのを見られたのがよっぽど恥ずかしいらしい。

「す…… すまん。初めて食べた味だったから……」

頬を赤らめて謝ってくるがその右手はずっとポテトの方を向いている。

「いや、料理人冥利に尽きるってもんさ。」

「しゃんはーいー！」

フードの中の上海も同意の意を示す。

「さて、美味しい飯もある。ここに居るのはただのスケルトンに口の固い人形だけだ。そろそろその浮かない顔の理由を話してみたらどうだ？」

「ははは…… やっぱりバレてたか。」

慧音が乾いた笑いを漏らす。

「実はな、

寺子屋

「今日の授業はここまで！各自しっかり復習しておくように！」

『はーーーーーい！』

「では、また明日。気を付けて帰るんだぞ〜！」

その日も私は授業を終えて、子供達を見送った後家に帰ったんだ。だがそこで私が教

卓の上に忘れ物をしてきたのを知った。私は急いで寺子屋に戻り、忘れ物を取りに行つたんだ。教室の前に着き扉を開けようと手をかけた時、

『ねえねえ、正直さ慧音先生の授業って分かりにくいよね？』

『うん、なんか話が難しくって あんまり頭に入つてこないんだよね。』

『宿題もよく分かんないし、はあ…… ○○ちゃんに見せてもらおう。』

時間にしてみれば1分にも満たない会話内容だったが、それでもその言葉は私の心に深く刺さった。

「なるほどな、話は分かった。」

「こんな事で落ち込むとは情けないと自分でも思っているが……どうも私は自分が思っているよりも傷付きやすいらしい……………」

そう言つて慧音は笑みを作るが、その顔はかえつて痛々しい物だった。

「……ありがとう、話を聞いてもらつて。少し楽になつたよ。」

「……………もういいのか？」

「……………ここはいい店だな。美味しいご飯に、気さくな店主。愚痴の捌け口にはピッタリだよ。また、お邪魔してもいいかな？」

「ああ……そりゃあ構わねえが……」

「ありがとう。それじゃあ、そろそろ帰るよ。お代はここに置いておくから。」

お金を払うと、慧音はそのまま人里の奥に消えていつてしまった。

「……………しゅんは……い？」

「ああ、分かつてる。このままじゃ終われねえさ。」

無理矢理な作り笑顔なんてコメディアンは好きじゃないからな。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d